

## 史料紹介 「森本州平日記」(十四)

昭和八年一月一日～三月三十一日

東京大学大学院

日本近代政治史ゼミ

### はじめに

今回翻刻する森本州平日記は、一九三三(昭和八)年一月一日から三月三十一日までの三か月分の日記となる。これに先立つ年の「森本州平日記」については、紙媒体では『東京大学日本史学研究室紀要』第二十五所載「森本州平日記(十三)」まで掲載済みであり、また東京大学学術機関リポジトリ(UTokyo Repository)では同号まで閲覧できる(<https://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/>画面左のインデックスマスツリーで人文社会学系研究科・文学部を選択の後、「16日本史学」を選択)のでご覧いただきたい。

本号所載の日記の翻刻には、日本史学研究室の石坂桜、塚原浩太郎、桑田翔、太田知宏、太田聡一郎、栗田敦、渡部亮、安藤克真、大窪有太、今田風人、錦戸智弘、山内俊(以上大学院生)、堀口慧梨、森田寛希、池田彩乃、小池晃弘(以上学部生)、劉奕賢(研究生)、菅原薫

仁(学習院大学人文科学研究科史学専攻博士後期課程)があたった。語句の説明には、石坂、桑田、太田(知)、太田(聡)、栗田、渡部、安藤、大窪、今田、錦戸、山内、の各氏が調査の上で分担執筆した。最終的な文字の確定には、太田(聡)、栗田、大窪、渡部の各氏が特に尽力し、日記全体の編集と最終的な取りまとめは、森本日記の今年度編集幹事である渡部亮氏があたった。

日記の翻刻にあたっては、漢字片仮名表記を漢字平仮名表記に改め、旧字体を新字体に改め、不明文字については□で表記した他、可能な限り原文に忠実に起こした。なお、ごく一部、個人の評価にかかわる問題を含む人名等は\*\*\*等とした。

最後になりましたが、森本州平日記を、東京大学文学部日本史学研究室の学生・院生が自由に読み翻刻することを許可され、翻刻文について丁寧にご助言下さった、日記原本所有者で現森本家当主の森本信正氏に厚くお礼申し上げます。また、常に惜しみなく尽力くださる飯田市歴史研究所調査研究員齊藤俊江氏にも厚くお礼申し上げます。

一月一日 日曜

晴。結氷余り甚しからず。四囲の山々は雪に埋れたれとも天龍河畔は暖なり。信也、下男正鎮守様参詣す。暗の中に人の音せり。午前七時弁天様より忠魂碑、三峯山の神、五輪様等、例年の通り回詣す。親子全部揃いて大福を喫す。父母共に健在、家族も亦健康、家門繁栄し一家和樂して他人は皆羨望の的の如し。朝食後小学校拝賀式に列す。

式場にて村長の施政方針の話あり。「本年は村の産業計画を組合農会と協議して立てる」等と話し、村長は「道はかり作つて居ると云ふ批難を免れん」等の脱線の話もあり。村長をして年頭に施政方針の演舌は近来に形を破りたるものなり。校庭にて例により神酒をいたゞき、役場に入りて専務と村長と三人鼎座して組合の工場統一問題に付毛賀の反対ある点等話し、村の産業政策上如何にしても工場統一して八幡の下端に組合を建て隣村四、五ヶ村を併せて村の産業方針を樹立せざるべからざるを説きたり。次て組合支所に於て年賀の宴を張て、予は、本年は組合にとつて大切な年なり、一致協力、此大事に当らんと事を促したり。市村と龍門寺へ年賀に行き、醉余「朝海」を詠す。次に石原を訪問し、窪田、椀屋、中島より晴男方の組合初集合。順太郎、隣を歴訪して午後八時帰る。

予記 神風のふきすさみてふ玄海に朝霧深し涛静にて  
本年は多事多難なる年なるべし。勇気を現して万難を排せざるべからず。熱を以て動かすべし。

折り込み用紙 賄買 療養費 被服費 教育費 土地家屋修繕費 交際  
際ヒ 税金 雇人費 通信費 旅費

【語句の説明】①村長：吉川亮夫のこと。吉川は一九二七年に長野県議となり、一九二九年から松尾村長に就任した人物で、土木事業への財政出動による農村恐慌の打開に力を入れていた。

②組合の工場統一問題：松尾村組合は第一・第二の二つの製糸工場を持つており、かねてよりその統一が提起されていた。また、それに合わせて事務所も統一しようとする動きがあった。第二工場主任の江塚佐三郎が支所への統一を強く推進したが、工場に近接する毛賀の組合員から反対論が出て、進展を見ないでいた。

一月二日 月曜

晴。今日は一日休養すべく決して家居する事とす。年賀状を書く。四百枚を書き終りて普通葉書を出す。下男正買初めの為上飯す。宏之に伴ふ。千翁堂にて菓子を買ひたるに景品鏡等くれたり。猪佐雄、晴男、和男、亮平等年首に来訪す。治雄も亦来る。刀剣二口(兼光、助宗)を示して、満洲の事件拡大せんとする気配となり憂ふべき事件発せずやを憂ひたり。

来客に接し居りて年賀状の書き余りたるものを書く。読書して此日を費し、組合の大事業をも着手せんとなし、前途を考ふれば徒に心のみせはし。本年は銀行の方も更生の声を挙げ組合の方も工場統一等の問題迫り居りて前途心せはし。治雄、晴男等にも其旨を話せり。

悠々自適せり。

予記 水野龍介。  
くさまくらしいのやかたのあかつきにゆめさめてきく波の音かな

乾斎  
海潮浩蕩 盪吟胸

曉色先開 富士峰

帆影帶來 暖日麗

春三万里 彩霞濃

一月三日 火曜

快晴。朝下男及男子等を集めて福繩を作る。漸く九時出来上る。昨年のものに比して精工ならず。午前中休養して「朝海」を詩恵を得る。然も出て来らず。悠然として午前中を送る。十一時、竹村順一旧臘来尿毒的中氣にて臥床する由を聞き、慰問旁に年賀に行き彼を病室に見舞たり。昨今大に恢復せるもの、如し。年賀状追加分百枚を出す。午後福住文男、前沢俊三等年賀に来訪し面接し、信也山本へ年賀に行く。耕地には伍組改正とあり、旧臘正秀を当組合の委員に上げ耕地相談の結果、六戸を以て一組とし、森本猶太郎、金田政五郎、森本吉郎平、順太郎、猪佐雄と予とを合して第六番組を組織する事となり。其他伍組大改正あり。之に付て異議なきにあらざると雖も暫らく隠忍して其成行を見る事としたり。耕地新年会に別に問題も出でず不平だら／＼なりしも兎に角新改正の様になし伍長出来たり。予も亦不賛成なりしも其議に参加せざりし故成行に一任せり。耕地初集会先ツ／＼平穩にして終る。木下祐助来訪、鹿子木先生「日本精神の哲学」を一部贈る。田中勇太郎東京より帰り来賀の爲父を訪問す。金原明善翁伝を一部寄贈をうけたり。夜は年賀状の整理等して寝に付く。前途組合の工場統一、銀行の更生等前途大事業多く頭を悩(悩)ますこと多し。本年は多事なる年なるを予想す。

予記 小島長四郎来訪し、支店廃止の有無、次席平沢忠次の進退等につき話あり。前途の仕事に着手せざる時より余りに心配すべからず。

運は天に任せて猛進すべく決意す。

社会の今日 山海関の戦、陸軍の勢尤もなり。荒木陸相は内乱か外征かに決心し居る。

一月四日 水曜

晴。組合支所に行きたるに青山も居らず市村に百十七銀行株名義を一任して製糸部開業を早くすべきを話して銀行に向ふて去る。銀行にては支店長会議を開き銀行の状況、更生の大方進(針)に付き予は支店長に一言して曰く、自力更生を以て之に当り近き将来に於て更生計画を建てる事に付て一言せり。事業始なれば銀行内に於て一献をくみかはし年賀を述ふ。午後四時終了し散し、予は両村田屋及三原屋へ夜中年賀に行く。西村田屋伯父旧臘来病床にあり昇平、元三等を招きて死後を託せりとの話あり。喜茂伯父も死を覚悟したりと云ふも何の病的の処なく自ら病氣を作りて床中に呻吟せるを見たり。夜十時帰宅す。信也も山本より帰り農林省人を運動しつゝあり。家の外交及事業等につきて、父の注文と予の事業関係との間に大なるケンカクあり。一意銀行の爲につくすを得ず。又組合の爲につくすを得ず。太田穰一に倅又は自身銀行へ出る事を懲渾す。予は曾てより銀行を退きて一意組合産業の爲に尽さん事を決意せり。

石川一郎より年玉菓子券壹円持参。

予記 「言葉多きは品少し。」胸に経倫(綸)なくして黙するは易し、胸に経倫(綸)ありて黙するは難し。之をつとめざるべからず。

熊谷貞雄へコロ柿一箱贈る。

【語句の説明】西村田屋伯父：前飯田町長、伊那銀行役員の上柳緑のこと。

一月五日 木曜

曇雪雨。朝猪佐雄の来訪をうけた。併して同級会の話があつた。午前十時に組合支所に行つて江塚を呼んで話した。製糸部の残業を一日も早く片付けて工場合併問題に猪進する事を話した。青山金三郎を招致して同し話をした。専務は一月十七日から初(始)めると云ふ事を主張して居た。午後三時迄組合に居て毛賀の製糸部関係の諸氏と七日本所に会合して工場の合併せざるべからざる談をすべく会合を開く事に付て打合せた。それから北原阿智之助を訪問して、作興会か思想方面の事を是迄やつて居たが、幸に上伊那、諏訪に比して赤化思想も漸く散消して、国体を呪ふもの、赤化に狂奔するものなくなつた事は作興会の力である、併して将来は、会は存するけれども事業は暫くやめて、精神的に他の団体と連係を保つるの会とすべき事を誓ふて、作興会の此後に処するは外にないとの打合せをした。自力更生も他の団体内に織り込むべき事であり作興会のみの仕事ではない。尚産業組合に報徳精神を織り込むには如何にすべきかに付て研究した。午後四時辞して鳥清に開かれた同級会に望(臨)んだ。会するもの吉川亮夫、田間善治、猪佐雄、青島久吉、田中句一郎、木下某、木下市太郎等であつた。十時半迄飲んで七年振りに開会した旧交を温めた。

予記 矢沢有一より年玉煙草「みのり」十ヶ贈つて来た。鹿太郎危篤にて病床に見舞ふ。

発信 年賀状合計四五〇枚出した。

東京麻布沢田五郎氏へコロ柿送る。

【語句の説明】作興会：一九二四年十月に発足した教化団体。理事長には北原阿智之助、専務幹事には森本州平が就任した。国家主義思想の普及を目的として講演会や活動映画巡回等を行ったが、一九三

三年に森本ら幹部が有名無実化する方針を決定した。

一月六日 金曜

雪後雨。雪の後に雨が降つて雪は消へた。朝九時組合支所に出張した。市村民次郎に頼んで橋倉文子の百十七銀行旧株三十を買ふたのを市村の名義とした。猶事務上に付命令を伝えて上飯した。銀行は午後重役会が開かれた。重役会には珍らしく山口氏外吉川、上柳、井村氏も出席した。三菱某に高橋練逸氏を頼んで運動する事及期末決算の状況に付て打合せをした。業間に飯田信聯支所と飯田町信用組合に年賀に歴訪した。午後六時帰宅した。家内中集まつて信也か卒業後の身のふり方に付て研究した。予は実地に農業をやる処へ修業の為行く方かよい、それには富豪の農園もよいし又成功者の農場もよい、要は農業的修養の為に二、三ヶ年間実地にやつて来るかよいと云ふのであつた。本人は農林省就職を希望した。父も予の意見には賛成であつた。尚夫は蓄膿症を病んで中学校の成績はよくなかつた。其の進路も考へさせられた。子孫の将来に付ても信也は兎に角として尚夫、宏は氣付(遣)かはれた。産業組合へ投じる事は予の銀行業よりも大切な事業であるので何時か此方針に付て決意する時か近く事と考へた。

予記 下男は帰宅した。父の前で信也と増恵と種々の相談をした。勝男が来訪したと云ふ。

発信 矢沢有一、年玉の礼。

【語句の説明】市村民次郎：組合事務員。一九三一年より組合支所事務部長・同帳場主任を務めていた。

一月七日 土曜

晴。雪消ゆ。陽春三月の如き温暖なる陽気なり。雪消れ道悪し。信也を野原、福住へ年賀につかはす。銀行へ出勤す。店頭閑にして一日も早く更生し仕事を初めたきものなり。午後二時退出して毛賀に閔医師の病を慰問す。閔惇逸年七八才、旧臘より病みて恢復覚束なしと聞き見舞ふ。嫁出て来りて挨拶し茶を入れて接待す。惇逸は子女十一人あり其子も医者を業とするもの多けれども一人として来り看護するものなしと云ふ憐むべき有様なりと聞く。辞して組合本所に来る。市瀬牛太郎来り打合せ置きたる毛賀区の代表者十二、三名を集めて工場統一に付て了解運動を行はんとせしに、牛太郎の不在によりて打合齟齬し来て、十、十一日頃に毛賀区に赴きて組合の状況を語り工場の統一の止むなきに至りたる事を説得する筈に打合せて置きたり。之より工場統一問題本筋に入らんとす。塩沢孝二等と面会して本所を凍豆腐荷作に貸す事に話す。帰途松田、平沢等の凍豆腐工場を視察して帰る。暖に過ぎて凍らず。予は本年の生糸相場を卜して生糸安の年なりと断し又米作も不作ならんと予言す。

予記 毛賀区と工場統一の止むべからざる事を話して行く事に約せしも打合せソゴす。

社会の今日 山海関の占領。

【語句の説明】市瀬牛太郎…松尾村民。毛賀耕地委員（一九一八・一九二四）（一九二九）、村会議員（一九二五）（一九二九）、常設土木委員（一九二六）（一九二八）を歴任した。

一月八日 日曜

曇小雨。風が出た。昨日は外套を着るも暖過ぎたが、今日は寒気は

強からされとも風寒し。朝喜代来訪して、父鹿太郎か病氣だが養子結婚の方は如何したらよきやと質問に来た。之に對しては其俣にして置け、若し万一の事があれば延期するより外なからんと答へ、其の当日及三ツ目等の郎党等の人員に付ても相談してやりたり。金田午前十時頃来訪して年賀の酒を出して昼食をして種々雑談して川路に去り、午後二時信也遊学の途に立つ。上京の途次片桐、宮沢を訪問する筈。見送りて八幡駅に行き吉川へ年賀訪問する筈なりしも来客にて困るからとの事にて中止せり。組合支所に歸りて支所にて事務を見、江塚と移転問題に付て議し、江塚の停車場付近へ事務所を建てる事及工場と事務所とは切り離す事等の意見を聴く。

信也遊学に就ては本人は農林省就職を希望したれとも予は三、四ヶ年間修養し来るなれば農林省の如きは無意義なり、それより實際に農事を実施する農場にて人格者の下に働き帰るべし、之も修養也とさとしり。子供等と共にカルタを弄せり。

予記 頭鈍となり読書脳裡に入らず。

発信 井深竹松、仮払金の契約改訂をたのむ。

一月九日 月曜日

晴。毎朝七時過ぎに起床する習慣となつた。床の中で組合の事や銀行の事が頭の中を往來した。組合では工場の統一問題毛賀民衆の意はどう動くか、中央部統一を賛成したとして敷地は早速地主が承諾するであらふか、移転には何日位か、るであらふか、青山がどんな野望を持て居るか、他の理事はドンナ意見を持つて居るか、郡部会の郡内工場統一はどんな風に進むであらふか、予の思ふ通り進むであらうか、生糸の前途はどふてあらうか等を考へた。又銀行は退いて組合専心に

努力するか、そうすれば生活はどうなるか等銀行の後は如何に成行くであらうか等も気になった。」朝九時半吉川を年賀に訪問した。芳太郎、亮夫の前で銀行と組合両者の間で多忙で仕方ないと話したら芳太郎老人は組合を青山に一任して銀行に精進せよと云ふた。又組合の工場統一した時井上の地を卜した処か老人の顔の色が変わつた。亮夫は変電所の地かよいと云ふた。十一時辞して八幡支店に丸山昌寿を訪ねて、毛賀の組合工場統一に関する彼の立場と丸山驥三を押へる事、村の大勢を見て仕事をせよと云ふた。それから銀行に出た。閑散な店頭であつた。

予記 組合と銀行とに付考へさせられて不愉快な日であつた。尚夫毛賀へ年賀に行く。市村へ百十七の名義書替委任状を出させる様にした。

【語句の説明】 丸山昌寿・丸山驥三…ともに松尾村民。丸山昌寿は村會議員（一九四二―四六年）、丸山驥三は毛賀耕地委員（一九四〇―四三年）、農業調整委員（一九四八―五一年）を務めた。

一月十日 火曜

晴。結氷あり。組合支所に行く。青山専務と相談して置き毛賀耕地に工場統一の件につき相談に行く事につき打合せ。毛賀は初めより工場統一に付ては第一工場へ合併するならば賛成なるも、支所へ併合は第一工場設定の当時より村治上に於ても（部落有財産統一、学校統一等）条件として設置したるものなれば之を徒に統一するは不賛成なり。（1）尚種の言を弄して結局支所へ併合する組合長、専務の意志に非ずやと疑ふ心もあり（2）て耕地内議論沸騰し村の将来を達観して統一を主張するものなく、自個か耕地より八分せらるゝを恐れるものありて統一の明なる有利なる条件に始より賛成せず。故に毛賀の主權にて是非来

臨を乞ふ旨申込あり、之を受諾す。尚工場と事務所を切離す事の将来有利なるを江塚は主張し、専務は其階梯として兎に角一ヶ所へ統一する事を主張したるも予は江塚説に賛す。午後零時半出飯、銀行へ出勤す。頭取重役問題に付心配せしも予は今の状態の銀行へは誰も飛び込まざるべし、当分此俵にて遇すべしと説けり。店頭閑にして仕事なし。更生資金をうる事に全力を傾けざるべからず。放課後宿三原屋に年賀訪問せり。

予記 木下喜吾次の肚は、伝馬町木下倭志雄の家、及宅地を伊那Bに入担し五千円の保証債務あり、之を何とか救助せられたき事、及木下倭志雄より予か買入れたる土地を分譲して貰い度き事の二点なり。

一月十一日 水曜

雨。熱雨降る。気温高く生温き風吹き外套も重感ず。直に出飯し近藤代書人の所へ行き、父が田中袴補に問合せたる下久堅村天神山前三年前県道改修工事に於て潰地となりたるもの潰地代金を請求すべしとの督促をうけたるに付、其分筆登記の委託の為訪問し委任状を与へて去る。銀行にては頭取風邪の為欠勤。予は之に代りて永井芳太郎よりの高橋練逸氏を頼み資金借入の件につき話をす、永井が東京より手紙を見て空返電せしむ。午後二時組合本所に来り専務、江塚、高橋を加へて毛賀より統一問題に付来りて話せよとの事にて出張、話をなす。予は村の経済より説き起して土地によりては生活出来ざる事、他〔多〕角的に仕事をせざるべからざる点より製糸業の繰糸能率と工費の点を説明し統一の必要を説き、郡下組合製糸の状況に付結へり。専務は工場統一の場合に於ける経費を数字を以て説明せり。江塚は器械的に説明し高橋は説明の要なしとの事にて無言（同伴したるを気の

毒に思ふ)。然るに毛賀連中の統一の要は赤子にても之を知る。要は敷地の問題なりとて古来よりの特種權益を振り廻して本所に合併せられたしと陳したるも、予は敷地は未定なり、之が決定は惣代会にて為すものなりとて午後三時より午後七時頃迄話したるが、毛賀は理論家多くして其話初より議論的となり面白からず。部落根性の發達に驚く。且組合の真意を解せず各主脳部は自個の立場を擁護する者のみなり。七時終つて高橋、江塚、青山と四人にて鳥清にて夕食して帰る。

受信 郡部会。松尾寅史郎。和泉正美。

【語句の説明】 県道改修工事：下久堅村を東西に横断する県道飯田和田線（秋葉街道）の改修工事のこと。同路線は一九二一年に県道に編入され、一九二三年から三〇年にかけて大規模改修工事が行われた。飯田和田線の改修工事は一九三一年に不況の影響を受け中断されたが、翌三二年・三三年には農救事業の一環として再開された。

一月十二日 木曜

晴。朝直に銀行へ出勤す。電話ありて頭取風邪に付土地特融資金に付小野、塩川等と政治的運動すべく出松せよと云はれ、急き家に帰りにて仕度し午後零時半発にて松本行。辰野支店にて小原支店長に話して、八二銀行松沢氏に電話を以て小野氏等の会見の場所を問合せしむ。午後五時松本着。八十二銀行に松沢氏を訪問せしに、富貴湯に行きて談らんと予を伴ひて富貴湯に到りて一泊す。松沢氏と昭和七年の恐慌により銀行業者の苦心を語り合ひたり。小野、塩川氏等の会合は十四日に延期したりと聞き、空しく湯に入りて来りたるのみ。一泊して湯にひたりつ、左の和歌を詠したり。

温泉の湯にひたりつ、硝子越しに何心なく降る雪を見る  
松沢氏の饗応にあづかりたり。

発信 永島政太郎、渡米の送別の意。席史郎、信也の世話、北原の娘の事。

【語句の説明】 ①特融：一九三二年一〇月から施行された不動産融資及損失補償法に基づく融資。日本勸業銀行、農工銀行または北海道拓殖銀行から融資を受けることが出来るとされたが、金融情勢の変化により実際の融資は不振に終わった。

②席史郎：松尾席四郎。森本州平の実弟。

一月十三日 金曜

晴。松本浅間富貴湯の一泊。湯治場の悠々たる所ありて心地最も悠々たり。然も悠々として居れされは午前八時半出發、帰途に付き午前十一時帰行せり。今日は監査役会ありて太田穰一氏のみ来行し、取締役としては山口、井村両氏来行せるのみなり。監査終り別に何の監査役らしき所もなく小言もなし。書類を繰り返して捺印せるのみ。銀行業の不安なる面白くもなき仕事なるも、亦組合としても心配なる事多し。組合としては心配なる事は（一）無限責任に他日なさざる可らざるに到れば組合員は貧富の差別なかるべし。（二）蚕糸業の将来の心配として或は天然繭糸は不用品となる恐ある事なり。然る時は養蚕郷は自滅なるべく、村の貧苦は無限責任によりて有産階級は共産的となる恐あり。銀行は面白くなく組合は危し。遂に両者共投出す時来るべし。

監査会終了後山口、井村氏等と蕉梧堂に入りて鹿肉を食し夕食を喫せり。心多忙なるも何のよき考も浮はず。

松本辺は雪一寸計り降りたり。

予記 富貴の湯より左の諸氏へはがき出す。

発信 山本父。石原茂一。我家父。信也。上柳緑。

一月十四日 土曜

晴。銀行へ出勤した。朝早く蕉梧堂に大平頭取が風邪で寝て居るのを訪問した。松本にて小野、塩川等が資金運動をする協議会に出席は、組合に重要な役員会を開いてあるので代理として出席は出来ないと言われるべく行つたが、其御氣(機)元(嫌)の悪いのを見て取つて帰りして、金田に松本へ出向出来ない旨を告げて頭取の了解をうる事とした。それから原田支配人を出松せしめた。有賀真九郎、小池元男の兩人伊那依託事件で早く保釈出獄の運動に來行したれば、共に裁判所に行きて沢井予審判事に面会し、事件につき被害は終みたれば至急出獄保釈となり寛大なる所置をとられたき由を訴へて退き組合に來て、組合は午後二時より開き役員会に列す。郡部会に於ける郡下組合製糸統一問題に付、来る十七日聯合事務所に会議あるべければ其態度を決する事とし大勢順応する事とし、尚組織を保証責任とする事に付ては時期を見る事とし、研究会の工場統一に付て経過を監事に報告して統一問題を研究せしに、石原は時期早尙論の如し。

千章年賀來訪す。

【語句の説明】①伊那委託事件：百十七銀行が、伊那委託倉庫株式会

社の倉庫に預けてあった物品の一部が欠けているとして告訴した事件。告訴後も倉庫側は和解を望んで運動し、前年末に百十七銀行側も和解を受け入れた。

②千章：代田千章。森本州平の実弟で代田家に養子入りした。

一月十五日 日曜

快晴。久男が來訪して一泊し、伊久良館の請焚をしたから山の買代金を貸してくれと話があつた。併し之れは断るより外なかつた。聯合事務所に於て下田書記と決算及八年度予算に付て打合せべく聯合事務所行とした。それから六年度の決算に於ては、予算の金か使用出来なかつた事や、八年度の予定の編成難とに關して作興会を如何にすべきか、国民精神の作興は赤化思想がどうであろうとも行はねはならず、銀行や組合の仕事も急かしい此間に此大事業如何にして国に報ゆへきかに付て考へさせられた。イツソ組合も銀行も放擲して一意専心此祖国を生かすべく没頭せんかとも思ふた。決算も出来て予算も明日の役員会に於て充分議を練り然る後作らんとして午後の組合製糸研究会に望(臨)んだ。研究会員は何となくヒヤカシ半分の氣分て先日案出した郡下七工場説を見た。然し予は断然之を近い内に実施せされはダメだと主張した。岡村や原唯一は主義としてはよいか到底出来ない事だと云ふ口吻を洩し、岡村は立石の大杉を鎌て切る愚論たと云ふた。予は之を実施せされは組合存立の意義がないと主唱した。平野、北原兩氏も賛成し、実行方法を研究し十七日の組合長会に望(臨)む事とし、此研究案を賛成し実施方法迄に進まん事を誓ふ事とした。

予記 終つて仙寿楼に宴を張つた。前沢俊三氏方へ年賀の礼に行つた。主人不在。茶を喫して去る。

一月十六日 月曜

晴。午前中久男と話した。彼等の山仕事も機械的の性質が充分であつた。父に話して見よと云ふて、上飯して聯合事務所て作興会の幹事会に出席した。会するものは六、七名に過ぎなかつたが、大に議論

研究せられて新予算の目標も付いた。建国祭及其他の方法か付いた。それから銀行出勤は止めて中学校の卒業生会に出席した。中学は十四日朝焼失した(奇〔寄〕宿舍のみ)。其れか為に卒業生が水道を引く事に尽力せんと申出を校長にした。校長も之を諒とし、予は吉川県議に其運動を托された。木下謙蔵と造船の二人が来訪した。

午後作興会に於ては、下伊那が赤化的の表面は平静を装ふも今尚安心すべき程度に至らざる事、及び自力更生運動の必要、各種団体に織り込みて、此作興運動即ち愛国運動の為さざるべからざるを力説して、遂に予算案の骨子を定むる事が出来た。併し六年度の予算の使用額少なき事や、八年度の予算編成に付ては大に骨か折れた。

青山専務へ手紙を以て十八日の研究会を延期する事を申送った。近藤代書人に下久堅道路潰地及登記等につき下久堅村と交渉せしめた。予記 作興会の件につきては外廓運動の手を離れて内部運動に進み第二期に入った。此点は常に心配した処であつたが衆知により漸く出来上つた。一安心。

#### 一月十七日 火曜

雪。朝五時頃より雪降り初〔始〕む。組合支所に行く。江塚と面会し、水城、塩沢某が「工場統一するならば支所に統一せられたし〔二〕との運動に來た話を中島勘一より聞きて、其に付江塚に統一を如何にせば成就せんかと法〔方〕針をとひ等したるに、江塚は然らば私か理事責任を負はゞよろしからん等の話あり。次て統一問題に付ては江塚は皆の賛同了解を得べく各耕地に了解運動を試むる方よろしからんとする事、それも厭ふ所にあらず等話して正午より聯合事務所に出張す。午後一時より杉原課長、木下中央金庫事務員来り、尚安達、其

他技手連中來り予定の行動たる郡下組合製糸統一問題を議したるに、意外に経過良好にして河野組合某より反対意見表れたるのみなり。県より來りたる官吏も之を充分に説明して遂に無事此伊那郡の組合製糸問題を片付けた。終つて仙寿楼に宴あり。大橋幸太郎の軍事劇を見て十一時帰宅す。組合を主とし銀行を次とする決心をなしたり。

#### 一月十八日 水曜

曇。組合にて江塚と話す。談は江塚が持論。第二工場か最も好適地なり(工場統一)と宣伝せる由を聞きて、役員としてマトマラザル話をするは無責任なりと責む。併し彼は水城へ自ら宣伝せしに非すと弁解せり。予は江塚か此説を流布するは却て統一を難に導くものなる事を告げて慎重ならん事を希望せり。上飯、銀行出勤す。予か銀行に止まらんか——之れは最も易き事なれども銀行業は不愉快なる仕事なる事、及責任を問はる、時私財をかけざる可らざるものなる事等の面白からざる点あり。然るに組合は将来ある事業なる事、面白味ある事なる点より寧ろ銀行を棄て、組合事業に走らんと決意せり。十七日の郡下組合統一問題盛に書かれたり。放課後回覧。銀行新年会仙安にて開かれ出席したり。本年は昨年と異り頭取及予と出席し頭取大元氣なりし。之れは百十七日Bの更生近きを物語るものとしてよき事なりし。

#### 一月十九日 木曜

晴。組合支所に行く。専務と打合せ事項ありたるに付待ち合せしも來らず。転じて役場に村長を訪問して、(1) 中学校水道引水問題、(2) 郡内製糸組合の工場統一問題に付、(3) 松尾組合の統一問題に付話し、最後の案としては中央部統一、村長の口キ、等を打合せた

り。猶銀行の小野秀一、塩川正巳等の資金借入運動に付吉川亮夫の意見を糾したるに、余り深入せざるをよとすとの返事を得たり。午後上飯、銀行出勤せり。

朝頭取、吉川芳太郎を頼みて上京し、高橋氏を介して三菱方面に運動の話をなすべく出発せり。山田検事より電話あり、三原屋裡坐敷を借りたしとの申込をうけたり。依て出張して其の建物を案内して一覽せしめたり。拾円の屋賃を出すと話あり。予は大体の話に止め父に相談して後決すべき旨申述へて去る。後より倭志雄、マスミの兩人立会の上マスミより雑言あり。狂気したるか如き言句を弄せり。例へば上柳多賀司は「君雄家族を引取らは八〇〇円を出さん〔二〕と云ひたりと。尚土地建物を売った(森本に)る事は森本に世話になりたるに非ず等トリトメなき事を述べたり。予は聞き流して帰りたり。

予記 下男正婦宅。松沢数一に吉川と水道問題に付会見の結果を告げ、飯田町の承諾を得る事か先決問題なりとせり。  
発信 信也。

一月二十日 金曜

晴。大寒の入りらしき寒気なり。結氷す。銀行へ出勤す。伊那委託事件につき菅沼、米山等来行し金田と共に出かく。予は三原屋へ出向して倭志雄、マスミを前に父の手紙を出して山田検事に家を(裏坐敷)貸せるとからと挨拶せしに(併も条件は山田検事の世話をする事、則ち掃除、火の始末等小間使をしてやり月三円位を貰つてやる事)小使銭取りをすゝめたるに、マスミは例によりトリトメナキ事を縷々申述べたり。倭志雄は「私は此家に住む事か出来されは他に家を見付けねばならんから明日参上の上御親考に面談の上にしてもらい度し」と

申さるに付き、困窮する現状にてよくそんな口かきけたものと思ひしに然らばとて辞す。午後一時銀行より関憚逸医師の葬儀あり退き、毛賀の関の告別式に行きて初七日砂糖をうく。組合役員会に列し役員の研究会に対する態度を決せんとしたるに、決定に至らず(市瀬理事不賛成——中央部に工場を統一すると云ふ案。畑中の西側)。決算の状態に付報告、賛成を得たり。午後六時専務と支所に来り塩沢好雄、佐々木鹿造と会見したり。壮年等の意見を問ふ事と江塚氏の決意を問ふ事等打合せ予の決意を示せり。

予記 江塚佐三郎支所に統一案を有し、水城中老をして其の意見に誘導し、他の新井、上溝等に運動せるもの、如し。それによりて役員の状態を疑はれたり。

一月二十一日 土曜

曇雪。聯合事務所へ行き下田と昭和六年度作興会決算及八年度予算編成せり。午前中其れに付没頭せり。予は下田が軍人分会の仕事多くして作興会の仕事少きを見て、若し現在の如くならば、作興会は他に一人の雇を置きてそれを使用し下田を排するか、或は軍人会にて他に雇員を置く様すべしと令せり。猶軍人会に臨時資金として百五十円、従軍会に四十円程度を貸与し居る事を責めて、之を明瞭になし置くべしと告げたり。午後銀行へ出勤せり。放課後金田宅へ年賀に行き、午後九時迄居合せて年酒を汲む。裁判所へ出頭して、沢井予審判事に依託問題に付て予審免訴を乞ひたる上申書を呈出したるも、申(親)告罪にあらざるを以て、上申は受付くべきものにあらざと勿ねつけられて帰る。今更なから法律的知識なきをくゆ。検事局より富草館事件につき和解書の取下げを受けて帰行せり。夕刻より雪降り初(始)め寒

気強し。飯田より午後九時帰宅せり。

木下倭志雄来訪し父と裡の書院を明け渡せと叱られてスゴく帰る由を聞く。東京高橋練逸氏に運動を頼むべく頭取、吉川両氏上京せる件如何になるや心かゝりなり。

予記 近来毎夜酒を飲みたり、併も体力旺盛なり。瑞松軒老師に古露柿一箱（市田柿）を贈呈す。

発信 山本、寒中見舞。瑞松軒。

社会の今日 聯盟の態度一喜一憂、我に不利なる点多し。

一月二十二日 日曜

曇。夜来の雪やむ。積る事三寸計りなり。銀行に株主総会開かれたるに付出席すべく上飯す。午前中支店長会議あり、予も昨年中の悪戦苦闘を謝し、重役として更生資金の借入に努力中なれば、近い内に吉報を齎し、捲土重来、当行の為に努力して貰ふべき時来るを近き将来に見るなるべしと告げたり。事務的方面に付ては金田より説明し各意見を交換せり。午後一時よりの総会に於ては木村、須藤の二総会アラシ来行したるも十円宛を与へて出席せしめしも、何等会議に反する事もなくして、二、三質問もありたるも平穩裡に終了せり。例年の通り行員賞与金を渡し重役報酬を分配して後、仙寿楼に於て重役と両支配人のみの宴を張りて午後七時散す。今日の総会頭取の出来バエ余り良好ならず。重役会の議案として政治的資金運動を県下十銀行に於て運動するの件は、佐久銀等とも打合せの上決する事として保留せり。三原屋裡座敷を檢事に貸す事に付ては三原屋より何の沙汰なかりし。牧内伯父来訪して、嫁取の祝儀は太宰楼に於て二月十一日執行の由聞及ぶ。

発信 松沢鷹三。

社会の今日 昨年十月三十日の共産党事件新聞に発表せられ作興会の立場よし。

【語句の説明】 共産党事件：一九三二年十月三十日に日本共産黨員約二千名を全国で一斉に検挙した熱海事件のこと。

一月二十三日 月曜

晴。組合支所へ行く。吉川、江塚両理事来り、工場統一問題に付て協議す。江塚は元より第二工場へ統一せんとする主張を把持す。吉川氏は批評的態度を持して理事の一員として考ふるの態度なく、他人のものを批評的に見るもの、如し。徒に論争せし好きものにてカラカヒタル結果となりたり。併し一面組合長として組合員を所信に引きずることを要す。吉川理事曰く「紙には書くとも心から其の気にならず、役員会の決議は単に決議として止まるものたるべし云々」と言ひし故、予はソンの理事か考へならば明日よりも予は組合長は御免蒙るべし…等論し合へり。併し之れは徒に論争したるのみ、何の得る所なし。午後一時漸く上飯せり。上飯して銀行に出勤したるも頭取と予は合はず。予の僻として言動が発作的のクライあり。故に頭取の容る、所とならず。聯合事務に町村長会あり、出席して作興会予算、決算を議す。下田に若し手不足なれば雇員をして事務を執行せしむべしと、下田言く仕事は自分にてやるから心配に及ばずと、則ち作興会の予算、決算会議に出頭す。別に何等の質問もなくスラく決議出来たり。之れ近來一〇、三〇事件新聞に連日掲載せられ共産主義の怖るべきものである事が各町村長によくわかつた事も一原因であり、下伊那に限つて赤化退治の出来た事を認めたる点もある。

予記 朝三原屋より手紙に添へて十円持参し、裡坐敷を貸してくれと申込に接す。父之を怒りて返却し、檢事に貸せる事としたと返事せり。三原屋が整理の際森本で買つてくれたとして全部を只で使用する態度にあきれ居れり。吉川理事は予に組合長として組合員を引する力がない事を暗に諷した。銀行て和泉に会ふた。社会の今日 連盟會議我に漸く迫り来る。

一月二十四日 火曜

晴暖。銀行か、組合か。吉川芳太郎は、組合は青山に任せて銀行に没頭せよと云ふ。大平も金田も皆銀行を本位とし村の事は足を洗へと云ふ。父は其の反対に銀行を止めよと云ふ。一般世間も亦そう云ふて居る。松沢や松下は父の説をとる。予は此問題が常に念頭を去らない。後説をとつて組合に於て何か将来を見出したいとも思ふて居る。組合へ出勤した。決算期であるので本所に行つて其状況を見る。組合も將來は一層難関にブツツカルと思はれる。工場統一問題は八釜しくなる。工場の統一よりも猶恐るべきは信用貸付金である。未収入利息が六年度は一万三千円であつたのが、本年は一万六千円余となつた。此の如くにして組合は益々困難になり、村の財政は愈々難局に遭遇するてあらう。午後から組合支所に於て役員会を臨時に開いた。それは来るべき決算総代会に付議すべき事項である定款の変更である。江塚は何故か之に対して反対的態度に出た。併し予は組合の思ふ通りの相談をした。それから合理化研究会に出た。予は経過を説明して、毛賀部落の工場統一問題には賛成だが位置によりけり也と云ふ事に付て問題となり、遂に各部落の意向を聞いて二十八日再び研究会を開かん事とした。面白くもない話のみであつた。組合員の内には予の貫禄が足らんと云

ふものもあつた。又組合長として決心が足らんと云ふものもあつた。併し研究会は役員から出た事ではない。研究の結果、成案が出来たらば、役員に提出方を申込むべきものであると思ふた。

予記 毛賀へ行つた時の話の説明もした。木下喜吾次が来て組合長と専務と取り違へた話をした。又木下倭志雄の受判の為に或は差押を伊那Bよりうけるかも知れんから其時は批判を頼むとの事であつたが断つた。

一月二十五日 水曜

晴。組合支所に行つて専務の来るを待つ。漸く十一時頃来組して予は石原監事の監査と来組を知つて上飯し、今日は組合へは行かねと石原と話す。組合の前途暗々たり。生糸の前途も亦暗々たり。予は米国の今日の不況が糸価をして七〇〇円に陥らしめたものたるも、前途養蚕業の多難なるを予期せり。此予期がはづれされは幸なり。上飯。銀行の仕事は店頭閉にして店員黙々として淋しき観あり。只資金を得て活躍期に入らんとしつ、あり。一般の世評も亦銀行かポツ／＼貸出を行ひつ、あるを報し、更生の機に入らんとしつ、あり。大切なる時なり。県へ資金融通運動小野、塩川県議によりて企てられ、当行も之に賛して運動する事とせり。南信新聞總會あり。仙寿楼に出席して留三氏に会いたり。午後六時帰宅せり。悠々たる日なり。廿六日耕地に於て講すべき組合の近況に付ての口演の大略を草す。旧正月なればとて夕刻家族一同と膳に向ふ。

予記 議政改変はなきもの、如くなるも衆愚政治の欠陥を示しつ、あり。

発信 吉田初治郎、三井横浜支店長に栄進を祝す。

受信 瑞松軒、柿の礼。

一月二十六日 木曜

晴。荒。雪少々。組合へ出勤す。石原来組して監査するに付其の説  
明係りとして之に応せんか為なり。午前中支所に於て青山、金井兩人  
と話す。談は組合工場統一問題に付金井と話せり。既に各耕地へ帰り  
大体の意志をまとめて出て研究する事は既にそれだけ微に入り細に入  
りたるなり。此の如き事は余り微細に亘りては到底出来ざるものなり。  
研究会の結果、各委員が自ら其委員たる資格に於て之を決する事能は  
ざるか如き態度既によろしからず。然らば此難問題をスラ／＼執行す  
るは不可能事なりと思ふ。

組合本所に於て石原と共に諸帳簿により検査をなし監査書を頼みて  
之を記筆せしめ、原案は廿八日朝各惣代に配布せしむ。監査終了して  
後青山と職員に与ふる賞与金に付て分配案を作製せしむ。夜七時より新  
井集会所に於て区内組合員の集会あり。組合の近況に付予の説明を求  
む。予は工場統一問題か現下の問題なればとて村財政の状態より繰糸  
能率及経費の關係、統一の必要経費の状況等を詳細に説明せしに一年  
延期説、経費縮少説、第二工場説等ありしも結局は大勢順応する事と  
して散す。丸山泰治は蚕品種の事に付小言あり。今村与一郎は経費の  
最少説あり。中島勘一も亦同し。其他マチマチの説ありしも結局大勢  
順応するの外なしと止をさす。

一月二十七日 金曜

晴。荒。雪チラ／＼。今年初めての寒気なり。流水に凍る。銀行へ  
出勤すべく上飯す。途中北河原連中に会す。聯合事務所に昨日より開

かれたる河野省三博士の「神道」日本精神の講義を傍聴す（神社協会  
主催）。併して日本精神に付て国民性に付て面白き話を聞く。河野博  
士にも直接面会して外国模倣の国民性なる事を聞けり。猶日本国民の  
国民性として（一）永遠性：神々しき、（二）単純性：清々しき、  
（三）統一性等に付て博士の説を聞く。一方銀行組合の方共に用事あ  
りて一時も悠々たる事能はざるも「朝に道を聴けは夕に死すとも可  
矣」と思ひて午前中博士の教を聞く。ヒシ／＼と胸にひ／＼くものあり。  
講義の間に先生に面会して説を聞くを得たり。午前十一時銀行に出動  
して午後二時迄居合せたり。頭取、山本阪井の葬儀に行きたりと云ふ。  
明廿八日特融問題にて頭取出長（張）する筈なり。午後一時より組合  
に監事会を開く。石原、塩沢の両氏来組す。監査終了して後ミトリよ  
り酒肴をとりよせて労を謝す。午後七時帰宅す。組合にて松山長三郎  
の事件につき強制競売すべく決し其命を下す。

予記 人の長たるものは無言沈勇なるべし。軽率と性急なるを戒む。

瑞松軒老師より。

受信 瑞松軒老師より。

一月二十八日 土曜

晴。今迄年第一の寒気なり。流水凍る。朝直に銀行へ出勤す。頭取  
資金特融の件につき其運動の為出長（張）せしによる。終日銀行にて  
働く。父、予に命じて甲号五分利公債壹万円を買はしむ。予は之を引  
受け共栄証券の渡辺氏来店したれば之に注文せり。父より壹万円を届  
け銀行に予（預）金として預入れたる。鏡台を乞はる、ま、に買ひて  
下男をして持ち帰宅せしむ。山本に行かんとして父に返事して放課後  
山本行。松下来行して吉沢工の件につき口を聞かんとして口をさしは

さみたれとも、銀行の立場の諒解を求めて陰に断る。彼銀行か良得意迄も失ふ事を忠告す。それは承り置く。余は銀行の有様の好転を見て退かんとす。組合にては第六回合理化研究会ありたるも予は親戚に不幸ある旨を告げて欠席せり。丸山松四郎死し葬儀あり、吊問して喫茶して去る。午後六時山本着。山本生家に行く事は極楽浄土に帰るか如く心自ら悠々たり。嫂如才なく迎へられ酒をくみて物語夜の更るを知らず。話頭に上りしは上松友三問題、座光寺の娘の結婚問題、久男の山の話等ありたり。

予記 耕地内道路問題より伍組改訂問題等面白からざる話のみ多し。  
発信 瑞松軒。尾張大根の礼。

一月二十九日 日曜

晴。雪チラ〜。山本の一泊、心悠々として快也。朝より炬達〔燧〕て父と話せは去る時なし、遂に兄は梅本の葬式に去り、予は父と相對して世の中の事を話す。信也の結婚問題より予の銀行関係迄話せば父は銀行の復起の時出行を辞せはよしとの説をなす。午後二時迄話して山本組合を訪問せしに島岡、竹村の両氏居合せて来る三十一日の総会对策をねり居たり。工場を一覽するに原料はよく、又工程能率共に上等なり。八本以上を揚く。我組合のそれに比して雲泥の差なり。大に参考となる。工場全部を見て午後四時辞して去る。直に帰宅すれば夜に入り丸岡屋幸治来訪して、耕地の内状より小〔庫〕一が新井川のかけ口の土地の件より銀行組合の借金の事迄話し出てたるが、彼が目に法律的知識なくしてあれ程に法的知識あるに驚く。併し彼が理窟を以て解決せんとする所に彼のよろしからざる点あり。余りに彼が経済のみに没頭して道徳を省みざるはよろしからず。小作米未納分四俵

を証書になさしむ。耕地内の紊乱は之を充分平和ならしめざるべからず。近來耕地内風波多きは困りたるものなり。

予記 悠々自適の一日。明日は組合へ行き決算惣代会に望〔臨〕みて決算を一決せざるべからず。夜、仙厓和尚の画本を読む。

一月三十日 月曜

晴。組合の決算惣代会である。午後一時から本所に於て開かるべきとなるので午前九時本所へ出勤した。それから明三十一日県村両社へ奉告の詞を書いて市瀬書記をして清書せしめた。又大体方針の原稿を書いて左の様な趣旨を惣代会に於て読述した。惣代会では七年度の波瀾重畳な状況等は組合員は少しも知らずして勝手な議論をした。併し原案に於て大体の説明をなし小会議に於て大体の審議をして、本会議に於ては読会省略て全部議案は承認通過せられた。閉会后小宴を催して午後九時帰つた。役員等には明三十一日奉告祭をして後にミドリに於て小宴を開くから出席せられたしと告げた。大体の気分は恰も議事に於ける反対党に対するか如き態度を以て惣代は役員議長に迫つた。此の態度と組合の将来とを見て組合長として非常時に止まる事はイヤになつた。江塚佐三郎は持論を主張して其の持論が通らんと云ふて辞任すると云ふ事も聞いた。組合の理事として勤める事も一年となつた。青山を組合長として将来やるか江塚を祭り上げるか、何と云ふとも予は止らんと決心して帰つた。

予記 責任理事か出席せんから開会は延はしてドーダ、利子を安くせよ、物品を安く仕入れて安く売れ、利用料を安くせよ、百十七Bの如きを何故取引銀行としたか、報酬は多過ぎる、生糸を何故參着売て年未売らなんだ、等の財政質問であつた。

受信 吉田初次郎、支店長就任挨拶。

一月三十一日 火曜

晴。午前中上飯せしに午後二時迄銀行に居る。併し倒れんとせる此

銀行を如何にして既倒に回らさんかの計は自分としては樹立に苦む。

併し責任上自らを鞭打ちし金田支配人と相談して行員を督令〔勵〕し

て資金は外にして行員の沈滞気分をもち返さんと苦心せり。頭取か出

長〔張〕し小野、塩川等と計り大沢辰次郎を介して政府に運動し、県

議を説得して県の力を借りてコンク的の土木事業よりは休眠銀行及金

融界を救はんとして、知事を乗り出さしむべく運動せる由を聞く。此

の成效を望みて止まず。午後より組合本所に役員集合して村県社へ参

拝し、昭和七年の波瀾重畳の時を乗り切り尚八年も同様に此難関を突

破せんものと神に祈り、予は自ら禱詞を作り役員と共に参拝したり。

役員の出席せるもの九名。吉川順次郎、石原、江塚は来らず。参拝終

了後ミトリに於て宴を開き各役員を召待せり。大平神官も同席して清

宴を張れり。帰途犬塚に立寄りしに、利国は村議に出てよと勧告し、

又亮夫か或は貴族院議員として野望あるらしとの話もあり、彼か政治

家として何時迄もやる事は反対なりと話し合ひて、蓬平の作詩を見た

り。

予記 組合を去らんと決す。之れは将来松尾村は不況により生糸価下

り益々人心悪化すべければ此際退くを良と決心せり。組合へ県農事試

験場長来訪すとの話青山よりありたり。

社会の今日 国際連盟会議の状況吾に不利。脱退せん意氣。

【語句の説明】 大沢辰次郎：長野県西筑摩郡福島町出身の政治家。長

野県会議員・福島町長等を歴任したのち、一九一五年の第一二回衆

議院議員総選挙では立憲同志会から出馬して当選したが、同年疑獄事件への関与を咎められ政界を引退した。政界引退後は東京に移り、伊豆水力電気株式会社常任監査役などを務めた。

二月一日 水曜

雪、後晴。朝直に上飯、銀行に出勤す。店頭閑散として行員惰氣あ

るに付、之を更生するには転任更迭をするより外なし。頭取来行して

事務をとる。然し徒に捺印するのみ。銀行としての価値経営に付ては

全く盲目にて、時として氣を腐らすか或は癪を起して予等に対するの

み。それよりは銀行経営に付て如何にせは可なるかを研究するをよし

とす。午後三時より聯合事務所に於て軍人会、消防組、警察、作興会

等々来て十一日の記念節に於ける愛国祭を如何にせへせかに付て、作

興会主体となつて催したり。廿数名来会し、十一日午後一時今宮原頭

に於て挙行する事に決し準備委員として十名計りを挙げ国旗掲揚其他

行軍行路等の打合を行ひたり。終つて裁判所支部復活祝賀会仙鶴に於

て開かれ、銀行を代表して出席す。増恵牧内へ結婚の御祝に行く。予

は組合の方には行かす。大衆新聞にて湧川問題及仮払金三十円等につ

き無根の事を記せりと云ふ。

金田と放課後予の銀行を退く話をする積りなりしも、支部復活宴出

席の為差止む。

予記 予め命し置きたる下田書記より愛国行列につき午後一時来聯す

べしとの話あり出席す。

社会の今日 聯盟会議第十五条第四項を適用迫る。

【語句の説明】 大衆新聞：長野県南部の地域紙『信濃大衆新聞』のこ

と。同紙は飯田町に基盤を置く夕刊で、林武雄が編集を務め、かね

てより無産政党支持の論陣を張っていた。

## 二月二日 木曜

晴。銀行へ出勤す。松下、沢柳両氏来行して、\*\*\*受判債務に付差押へたる件につき之れか解決として口キ、に入りたり。彼等の主張は、銀行としては質権をとれば尚質権付の債権をとるは余りヒド過ぎる、若し喧嘩とならば却て銀行の不利なれば譲歩の出来るだけは譲歩して解決すべし、故に結局兩人の主張は「質権をとる以上は\*\*\*の判だけは除ひてやれ」と云ふのであったか、銀行では質権ダケトスルならば質草を増すべしと告げて最後の訣列「裂」となる。今日組合に(支所)に於て対電委員会ある筈なるも欠席せり。天竜川水電問題進捗せるによつて漁業問題解決せんとする時期に向ひたるのである。牧野貫治を銀行に呼びよせて郡下工場統一問題に付意を通せり。放課後春風に於て清福講の調停法にかゝり之を協議の結果、来る七日林雅次、杉山為次郎と出庭する事とせり。講後の手加減多少あり。

受信 四王天中将。林利悦。

【語句の説明】 牧野貫治… 牧野貫二。一九一七年より鼎村の村会議員を務める。なお、ちようど一九三三年二月二日には鼎村産業組合理事にも選出されている。

## 二月三日 金曜

晴。銀行へ出勤す。既に予は銀行家として立つ意志を有せず。非戸主たる間月給取に甘せんとして銀行に入りたり。併も産業組合長と掛持ち両兎を追ひつゝあり。産業組合も前組合長江塚が名と実をとる為に、組合をして放漫な貸付をなし名をとり、一面組合を利用して実利

を得た。此跡を引受けた予は不明であつた。故に予は明年の改選期に於て辞し、一方又銀行の方も頭取の予に対する暴言によりて辞するの時機近付つゝあり。朝早く新井実と常盤信太郎の兩人来訪して糊摺発動機を購入し度ければ寄附を乞ふと申込あり。予は半額を地主側、半額を小作側にて出金せよと云ふ。交渉の結果1/3を予か負担すべければ、余は他の地主と小作人則ち貯金より支払ふべしと告げたり。又俵を規定通りのものにするは金五銭の奨励金を交付する旨を告げたり。父と相談の結果之に決したり。午後六時より龍門寺に於て無門会幹部会あり、出席して円卓に於て御馳走になる。高橋、市村、平栗等来る。仙厓和尚の画帖と讃を和尚に示す。

予記 漁業組合支所にありたるも欠席せり。

社会の今日 聯盟外交益危機に瀕し、糸況六八〇となる。

## 二月四日 土曜

晴。組合支所へ出勤す。惣代会決議録の草案書点検し、小会議中に於ける質問応答に關しては之を削除し、細部に亘りては心算とするのみ。江塚佐三郎来組し、漁業問題が愈々補償に付県より其希望額を提出すべしと云ふ段取迄到達せりと伝ふ。併して漁梯を構築するにせは要する計費及漁梯により漁損料を補ふか為に要する放漁施設費を加算したる額を会社に請求せる由を聞く。信用評定委員会に付専務に頼みて後、午前十一時上飯、銀行出勤し金田支配人に予の一身上銀行より脱出する事に付て告げ、頭取の重役会に於ける再度の暴言「何時でもイヤナラヨセ」に付、頭取とソリ合はされは更生の機を見て退く旨を告げしに、金田は逃かさじとする。予は逃げんとして遂に物分れとなり、井村氏を入行重役又は支配人たらしめて去る事に決心せり。\*\*\*

問題に付松下、沢柳仲裁に入りしか之を断りたるに付、萩元弁護士来行して親戚の一員として頼まれたは中〔仲〕裁の労を取るべしとの話あり。松下、沢柳を断りたる事、銀行の更生の時に於て敵を作るの不利等を述べ、仲裁によりてマケてやるべしと告げ、兎に角一先延期する事にせり。

予記 午後六時帰宅。直に喜代の祝儀の仕度に行。組合の者共集まり小宴を張り。

## 二月五日 日曜

快晴。寒気強く万物凍る。市場喜代、松島音松二男を智養子としてもらひ鋤柄忠次郎のハシカケにて祝儀を行ひ、朝八時より仲人として出向す。増恵と嫁女を伴ひて午前十一時松島方に至り親子の盃事を予の掬にて行ふ。酔ひて眠る。午後六時頃聳をつれて喜代方に智入す。松島方にては飯台を置き其上に会席膳を出して宴をなす。松沢源治等召〔相〕伴なり。喜代方よりは嫁入郎党として五人行き、平沢豊松等五人なり。松島よりは松島源治等五人来る。宴は順序よくすませて午後十時半御開きとなり、十二時頃帰りて寝に付。終日酒につき居り頭腦朦朧となる。喜代も立派な宴をなし本膳客十九名あり。智も嫁も結構にて身分不相応なる宴なり。当方よりは喜代には祝儀御橋として三円、松島音松へは贈として三円、御橋として二円封入し寿留女を付せて贈る。祝儀の客には新伍組の連中出て来りてよく躍り余興沢山なり。砂余溜〔留〕の組合は理窟を言はずよく働きよく舞踏する組にて、よき組合なり。

予記 祝儀の客にて万事憂き事を忘却す。組合信用評定委員会に欠席せり。

受信 永田少将、寒中見舞。

## 二月六日 月曜

晴。昨夜の酔にて朝九時迄床に就けり。午前十時組合支所に出頭して青山専務に面会して、昨日の組合信用評定委員会の模様を聴取し、役員報酬の分配に付ては組合長一任せしむ。猶種々相談す。繰糸は来る七日にて終了し、終了式は十日午後一時より支所に於て執行する事とす。午前中組合に居りて事務上の打合を行ひ、午後上飯、銀行へ出勤す。頭取鎖〔瑣〕末の事迄小言を言ひ、之に服するは予の權威として黙従し難けれども隠忍す。之れ銀行の大切なる更生期に於て内部よりのケンカを外へ出したりとせば世の物笑となるのみならず、銀行破滅の因をなせは忍び難きを忍びたり。吉田組合に於て役員会へ出席して予〔預〕金の保留を頼むべく、午後三時半同組合へ出頭す。役員会に於て予は次の声明をなす。「百十七Bは吉田組合に対しては絶対信認をしてくれた点より、同組合の預金に対しては重役の私財を提供しても御迷惑はかけん決心なり。併し目下銀行は更生の途にあり、故に旧預金に対しては寛大にしてみらひ度し。新規取引に対しては目下具体案なし。目下更生資金の金策中なれば必ず之を以て更生せんとす。大切な時機なれば宜敷たのむ。以来預金に対して御心配かけたるは申訳なし。新更生の途上にあれば余り預金も払戻したくない。」宮島氏は新規取引に付て何か案ありやを問ふ。之に対しては案今の処はなし。酒三升を贈り之を以て宴を張りたり。

予記 伊藤岩太郎氏を村田屋に訪問し相続と売買の事に付問合せたり。

二月七日 火曜

小雪。晴。組合本所に行き役員報酬金五百円を分配す。猶市村に囑して事務員に配したる足袋代九円三十五銭を松田屋に支払はしむ。午後銀行出勤す。曾て重役会に於て大平頭取か予以に放言せる、何時ても自決せよとの言は、今猶耳底に新に存すれども、銀行をして此状態に置きて逃くるも宜敷からずと思ひ、銀行の更生立て直るを見つ、機を見て退行する事に意を決し機を見つ、あり。

市場喜代方三ツ目五ツ目にて親子の往来あり。増恵臨席せり。

河野文学博士に松尾村の神社中心主義の要綱を寄贈す。

福沢憲和来行して思想史一部買求め行く。電話にて加藤寛治氏来峡するに付作興会と郡農会主催にて講演会打合せたり。

信也へ手紙にて、農林省入りは就職短時日にては甲斐なければ個人経営の農場にて実地に重きを置きて実習し来るべし、と申送る。信也は農林省に入りて筆を執つて官吏生活を送らんと志せるもの、如し。予は自ら耕し自ら修めて行くの農士を望むのである。

社会の今日 連盟倍々我に不利(満洲国不承認)。

受信 大日向美代里。永田鉄山。

【語句の説明】加藤完治：農本主義者。一九一一年東京帝国大学農科大学卒業。一九三三年時点では日本国民高等学校校長を務める。満洲への移民にも尽力した。

二月八日 水曜

雨。寒気大に緩む。日蔭の雪消へたり。朝聯合事務所を下田を訪問すれば、加藤寛治先生を頼みて建国祭並に一場の講演を頼むべく話中にて、原幹事長と共に加藤氏に打電したり。十三日講演を聞くべく決

せり。十一時銀行出勤せり。上松彦太郎来行したり。午後七時放課後女子補習学校謝恩会小学校に開かれたれば招かれて出席す。予は例によりて苦学の真の学問にして、自ら働き自ら学ふものか真の学問となる旨を述べたり。謝恩会に於ては余興として朗読、朗詠等あり。予は一場の演舌をなす。朗読の中に「土に親しむ」事あり。又奥田正造氏の茶味よりの一節を読みたるあり。皆哲理的の読物なり。近來の女子は男子同様の活気あり、演舌等少しも憶(臆)する所なく高談放笑す。又頭の働きは古の比にあらざれども、手足の働きは昔より劣れるもの、如し。茶菓を供せられて後、午後九時半帰宅す。青年か体操場にて剣道をはけむを見る。勇壯にてよし。

増恵風邪にて臥床し予は風邪にて咳出つ。

原理日本社へ二円、中村弘太郎へ三元(河村先生遺稿代)送金す。

予記 大日方美代里より鴻山の書画写真状送達しよこせり。価二円八十銭。倉田清一より蓬山の黒様の画二円にて買入れたり。

発信 信也。大日方美代里。

二月九日 木曜

快晴。暖気頓に加り春風にかすめるか如し。一日静養す。朝より風呂を焚きて入浴す。増恵も母も皆風邪の気味なり。一日悠々自適すれは一日は永く、家庭の人として自ら豊なる気分せり。仙厓禪師の拾得の画に讀せるあり。次の如し。林下設門昼不開。私人掃尽滿庭埃。愧吾偏僻憐清淨。又有猫兒放糞回と。仙厓禪師画集を取り出して見、年賀状を整理等したり。春日遅々として暮れず、大日方美代里氏の贈れる鴻山画集も取り出して見、尚所蔵の刀剣を取り出して打粉を施し油を塗布し保存せり。刀剣を見れば心自ら正しく清澄となる。夜に入り

て上柳敏雄来訪し、千代田生命保険会社より店員来り帳簿を調査せられたるに消費金式千二百円余あり、之に付銀行より予〔預〕金の払戻を得度し、又上柳喜右衛門か千代田商会の代表者となりたれば、此の際保険料徴収金を収め行くとして敏雄の費消に付き大平と予に面会を求め、鋭き催促ありたりと報告あり。敏雄は川路に向ふ。

## 二月十日 金曜

晴。寒気緩む。組合の用と銀行の用とありて午前中上飯す。上柳喜右衛門より聞くに、千代田商會に付本社名古屋支社より監査人來飯し千代田商會の内容を監査したるに、二千二百円余の使込みあるを發見し、前日より泊り込みて調査中なれとも金策出來す、家族名義の貯金より僅に三百八十円出して残預金壹千円として、千代田秋山氏には來る十七日何とか支払ふべしと大平と予にて引受たり。秋山氏は仲々強硬にて理を以て責任を問はんとし追求悪辣なり。\* \* \*も種々弁明すれども駄目にて、婦名を午後一時を五時迄伸はし遂に大平と予との言質を与へたるのを信して去る。銀行には用なかりしも、南信倉庫の建物敷地を檢分に出かけ、帰りに聯合事務所行。市瀬、原、署長を招きて建国祭につきて協議し準備して夜に入りて帰る。南信倉庫は売却の意なり。之を如何にするかに付研究せんとして林に案内せしめて全部倉庫を廻る。明日の天氣の清明ならん事を祈りて止まず。

## 二月十一日 土曜

快晴。暖なり。信也東京より就職問題に付相談すべく二日の休日を利用して帰宅。午前九時より小学校に於て紀元節及建国祭あり列席し、終つて大沢茂尾女史三十余年間教育の功により村より表彰をうけ其表

彰式あり。予は村會議員を代表して大沢茂尾先生の徳を「慈母として慕はるゝ」の実例を見ると賞め、学校教育、社会教育上大功ある事を述べたり。終つて裁方室に於て茶話会あり。中途にて退席して上飯、聯合事務所に入りしか、既に原、市瀬共々去りしに因り沢柳村長と兩人にて風越館に至る。学校生徒、消防、訓練所、軍人会等出席し無慮六、七千人、此日風なく暖にて式は予定の通り進行し、市瀬聯分長の開会、君か代、国旗掲揚、黙禱、建国之頌は予之を朗読し、原幹事長の動議により郡民大会に引直して宣言決議をなし、飯田町長之を朗読し万歳三唱にて式を終了し喜々として散す。此の盛会は稀み〔に〕見る大盛況なり。赤色分子も之によりて吹き飛ばさるべし。吾国民の意気また衰へず。連盟の空氣悪化の時、則ち一旦緩急の時日本人の氣は表れる。心配に及ばないと思ふた。終了して風越館に少憩の後帰飯したり。午後三時太宰樓に於ける牧内亮平の結婚式に列席。惣代、滝沢にも会ふ。川路安藤弥太郎二女をもらい、先方両親々戚来り両者合して宴ありて午後十一時半帰宅。

【語句の説明】飯田町長：小西吉太郎のこと。小西は一九三六年まで町長を務め、翌年飯田市制が敷かれてからは臨時市長代理を務めた。

## 二月十二日 日曜

晴。雪チラ／＼。荒。信也、敏子兩人来り居るも作興会の用件にて加藤完治氏扶桑組合の講習に來映し居り扶桑館に於て講演をなし居るに付、面会して先生の作興會講習に望〔臨〕みて貰ふ様に頼みたり。幸先生講義中なれば矢沢共一、有一の周旋にて先生の講演の一節を聴く。先生は〔一〕日本人たるの確乎たる自覚を持って」と云ふ事を強張り、農村の更生や景氣の如何を心配する前に「日本人たれ」と云ふ事

を説けり。其の説く所力ありて其の心況我意を得たり。講義の閑に先生の宿せる室に案内せられて面会して作興会に出演してくれる約束を改めてなし、猶信也の将来として入学の希望を述べたり。午後一時半組合本所に於ける製糸部終了式に臨むべく急ぎ帰村す。

午後三時より本所に於て終了式を行ふ。校長來賓として来る。終了式に於て開会の辞として本村の産繭の準次漸減する事、一釜当りの生産力の少なき事等に於て委員に一考を煩はすと述べ、閉会の辞に於て六月の開始の時は健全て再び相見へん事を約し十ヶ年皆勤者を賞めた。夜に入りて帰宅し敏子と話し、信也へは本人の希望により農林省就職は其の意に任すべきも第二希望としては万一農林省へ就職不能の節は友部の高等農民学校へ行く事とすべしと決論を与へたり。

【語句の説明】友部の高等農民学校：一九二七年に農業者の人材養成を目的に開校された日本国民高等学校のこと。初代校長は加藤完治。現在は日本農業実践学園となっている。

二月十三日 月曜

晴。信也と敏子と朝家庭の団欒を満喫した。信也は農林省へ入つて技手生活をなさんとし屢々其意を洩らしたが、農林省生活は官吏として一生を過すならよいが、郷里へ兩三年中に帰つて田園生活をするには個人農場か又は友部の国民高等学校入学修業が一番よい、併し今迄農林省入省を運動したから第一に之をやつて見るがよい、若し入省出来ない時には友部行とする事に決して彼は喜んで朝九時半出発した。組合へ行つて青山と製糸部大方針につき研究した。彼は工場統一の要を説き、理事の決心の一致を説いたが予は到底今の理事か自個の立場のみを考へて居るから駄目だと云ふた。

落木の挽夫を呼び寄せて集蒐の交渉をした。中途で退席した。それから加藤完治先生の講演が商業学校講堂にやるので上飯。中田幸先生、小林洋吉一派と自動車で一所になり聯合事務所へ行つた。先生と面会、農技術員は揮毫をなさしめた。予は銀行を欠勤した。先生は予に対して国民精神を作興せしむるには「八ヶ岳麓にて黙々開墾に従事すべし」と云ふた。予は之に対して渡辺薫美氏も同様の事を言ふたと話した。

鹿太郎が死し見舞に行つた。

予記 信也出発上京。作興会加藤完治先生講演。組合にて青山と木下と製糸部大方針につき研究。鹿太郎死す。

加藤先生の講演は結局日本精神の高潮であつた。桜町に送られて帰つた。

社会の今日 国際連盟愈々我に不利、席を蹴て立たんとす。

【語句の説明】鹿太郎：親類の市場鹿太郎のこと。

二月十四日 火曜

晴。組合支所に於て青山、江塚と製糸部事業に於て打合をなす。則ち原料繭不足の結果一年中僅に半年位の作業にては決して有利なる製糸部事業を営む事は出来ざるに付、第一、第二何れかを廃止し、一方に於て繰糸せざる可らず。然らば支所一方に於て繰糸し他は其俣とし置かざる可らず、則ち之を役員会に諮り役員の態度を決するの要あり。然らば此大問題に於て役員会を開く事とせり。然し決して役員会に於て之を決する事は不可能なるべきに付、役員が其の態度を決し置かざるべからず。尚予は、役員中に其位地を守るに窮々たるものあるに付、到底決心は付かざるものなりと決せり。併して之を敢行するの決

意を示せり。午後上飯、銀行出勤す。千代田商会の敏雄費消金壹千円を如何にして調達し之を發送すへきか、又今後千代田商會を如何にすべきかに付て社員總會を銀行に開き、大平、上柳本家、関島と予の四人及敏雄と相談せし結果、第一案に対しては西上柳の懸幅華山外敷点を呈出し、之を担保として各自250円を持ち寄りて之を以て千円を本社に發送する事、後者に対しては敏雄より今後銀行にて千代田商會の仕事全部を營業して貰ひ度しと申込み諸経費を差引、残額を西上柳に交付する事として十六日再會の上決する事として散す。

思想史か村書店へ五部販売委託す（手取金四円の契約なり）。上製。予記 支所に於て青山、江塚等と製糸部事業に付て打合を行ふ。銀行にて西上柳千代田商會に付て社員打合を行。社会の今日 聯盟の外交愈々吾に非。

## 二月十五日 水曜

晴。惣代会決議録に調印して差出す。猶事業報告書に捺印して呈出せしむる事にせり。朝父に千代田商會の報告をしたるに父は大に激昂し、顔色を替へて激怒せり。併し事情を醇々として説きしに平靜となりたり。又勸業銀行の配当を受取方に付相談せしに、赫怒し大に興奮しつ、あるを見る。増患数日前より風邪にてありしが父と共に吉川医師を招きて診察せしむ。父は興奮の度強く且又血圧も又235あり平常より10高く健康状態よろしからずと診察ありたる由増患より聞く。午前十時より鹿太郎葬式に出頭す。初め告別式を勧め之を行ふ予定を中途変更して行列をなす事とし、酒肴を饗応する事とし、昨日より下男も使はしたり。葬列は午後二時半出棺し之を統督しやりたり。父も予が銀行出勤を中止せよと予に勧告あり、予も時機を見て銀行より手を曳

く旨を告げたり。近來漸く銀行を止める意志働きつ、あり、又銀行へも勤務する時間に同し。大川井勘定十七日午後四時中島に於いて行ふ事とせり。

予記 鹿太郎葬式にて終日す。増患風邪。銀行を休む。

## 二月十六日 木曜

晴。銀行に出勤す。放課後萩元弁護士\*\*\*の件にて來訪したれば之と折衝す。前日原田支配人仙寿樓に行きて萩元弁護士、松下等の\*\*\*擁護派と折衝し大体案を定めたるも、其内金利を六月、十二月兩度払としてもらい度旨申込たるに先方之に應せず、遂に物分れとなる。南信倉庫売却の件につき鈴木來行したるも代金未定にて返す。放課後西上柳の件に付（千代田商會の保険料を\*\*\*したる件）本家に會合して相談したるに、良年と予と敏雄と主人喜右衛門のみなれば改めて不日再會して千代田商會事務を銀行にて全部やるか否かは決する事とし、現金一人に付二百五十円宛持寄り金壹千円を作り上柳喜右衛門に託して置けり。又担保品華山の幅外敷点をとり是又喜右衛門氏に預け置きたり。（以下、七行分削除）

受信 河野省三博士。

## 二月十七日 金曜

雪。雪が朝から降り出し夕刻に至り五寸計り積る。組合に午前九時より役員會を開き、（一）惣代選挙の件、（二）農會と協同主催部落懇談會を開催する事、（三）製糸部減釜に付て相談した。（三）は最も重大性のもので午後四時過までか、つて相談の結果、支所へ減釜し本所を廢するとせば此際問題悪化するを恐れて毛賀、清水、代田、城之に

反対の様子なれば、此際組合の混乱に陥れるを知りつ、非常手段を行ふはよろしからずとし、遂に本支共に同比率を以て減釜する事とした。江塚は支所へまとめる意見にて極力南部の組合員に呼びかけ若し容れられざれば辞すると主張したけれども、之れは重大なる時機に於てなすべからざる事であり、混乱の責任は負はざるべからざる旨に付南部及青山の反対あり、ものにならず、上記の通り決せり。江塚は既に辞職の口実を求めんとして居る際なれば江塚の説は容れざりしが、純理としては之にてよし。午後五時中島に大川井勘定あり。猪佐雄、光治と予と中島の四人にて勘定せり。其結果十五円余となり、其内七円は我家にて負担分なり。

予記 銀行欠勤。組合役員会。製糸部減釜に付て話した。大川井勘定中島にありて夕刻出席した。

二月十八日 土曜

晴。椀屋の光治が朝来訪して耕地委員の悪口や、惣代選挙の管理者として前惣代がやつてよろしきや否やを問はれた。彼が近來狂気しみた事を言ふので後の質問に付ては差支なしと答へ、前の件につきては悪い事は御互に忠告して矯正すべきであると論じて置いた。又曾て彼から借入金を出してたのに対して借用証を下書して渡して置いたのに対して之を戻返すべく申渡して置いた。常磐リエが来訪して才治郎を組合へ永く使役してやった礼を述べ退職金の請求があつた。青山から借金の旨を告げて五拾円にマケて貰ふてはどうだと話した処、一任するからと云ふて頼まれた。銀行へ出勤した。\*問題に付銀行の交渉が腰弱きを論じ、年二分で六月十二月を副約書で解決することとした。共栄証券の渡辺が来て、五千円の父か注文した公債を買ふ事として入

手した。之を父に交付した。代金をマケよと折衝の結果3円マケサシた。上溝、久井の部落懇談会があつて、上溝へ先づ臨席して組合の状況に付て報告した。それから村の財政の借金の増す話から製糸部の減釜に付て話した。久井耕地に移つて、先に専務が話したので予は組合の方針と村財政の赤字の増大する事を話した。

予記 光治、リエ来訪。銀行出勤。上溝、久井部落懇談会。木下千之助は個人の組合からの借金の(保証債務)に付て話しかあり、其末辞表を出すと脅かした。面白くない日であつた。

二月十九日 日曜

晴。毛賀\*の家庭に付家族打合をなす。(以下、二行分削除)農家組合糶摺機購入の為晴男、実、信吉来訪し、機代三百円の内金百円を寄附する事とす。神栄会社岡部来訪し、出荷に付て話あり。之に対して県より仲買人を省くべし、糸聯出荷を強請せられたるに付三井直送をなし居れる旨を答ふ。組合行、本所にて農村及中小工資金を役場より借入する事とし農山漁村低資を支払ふ。郡農会主催農学校に於て修養団講師上田二郎氏の講話あり、出席して之を聴く。其説く所鬼神を泣かしむる慨あり。青年の奮起を促したり。其の朗詠する所に「千よるづのすみらみことか手をとりにて君か辺にこそ死なん(め)とぞ泣く」と云ふ。蓮沼氏の作歌あり。脳に感せり。「朝に道を聴けは、夕に死すとも可矣」。郡農会よりは田口来たり、堀と云ふ県農会技技〔師カ〕に面会せり。木下千之助を訪問し、木下が\*\*\*の借金を三五〇円の内五〇円は過払したりとて不服と共に悔もよこせりと怒り居り交渉まともならず。予は過払を返す事、預りたる証書を返す事の二項を主張せしに、彼は後者のみを主張したり。物別れになれり。彼は

報酬を返さんと云ふ。ダッをコネルものなり。

予記 農家組合にて糶摺機購入資金百円を寄附する事とせり。岡部来訪。組合行。郡農作興会主催農学校に於ける上田二郎氏講演を聴く。木下千之助問題。

社会の今日 連盟我主張を容れず遂に脱退の決意をなし、国民皆意気冲天。

二月二十日 月曜

晴。春寒料峭にして寒中に劣らざる寒気なり。午前中組合支所に行きて事務を見たり。生徒裁法〔縫〕の講習をして貰ひ度き希望あり、大沢茂尾女史の総監督にて関口女史を頼みて支所に於て講習を開く事とせり。依て右講習会の開会を宣して講師を生徒に紹介して、組合に於ける惣代選挙なれば新井耕地集会所へ集りて其状況を視察す。午前十一時半上飯し銀行に出勤して後、放課後西上柳問題及千代田商會問題に付き関島、大平、本家上柳、敏雄等と協議す。千代田商會の営業は敏雄には任せて置く事出来されは、如何に将来なすべきかに付協議せり。結局銀行へ持ち込むも厄介を増すのみなれば、本家に背込ますべしとの事にて本家に話したるに、本家にて引受けるもよしとの話出来たり。猶先日幅物は崙山を本家が売込方奔走する事とせり。猶居残りて伊賀良支店閉鎖より之に伴ひて行員の移動に付研究せり。金田、原田と共に研究したりしも名案も出でず。午後九時帰宅せり。

父の命によりて共栄証券より五分利甲号等公債額面壹万円を買入たり。父は相場の近來下落したるに付彼是言ひしも、之を容る、事も出来ざりし。母上柳家へ新年初訪問に行きて泊る。

予記 組合惣代選挙。銀行にて千代田商會の始末を議す。支店閉鎖に

付研究せり。七三に米參俵一駄十六円にて売る。

社会の今日 元老会議、軍人會議に於ても連盟脱退に決す。

二月二十一日 火曜

快晴。組合支所へ行き青山と木下千之助が同族\*\*の保証弁償をなし、証書金額訂正に付過払五十円をなしたるに付、屢々酒席等に於て訴へられしも黙殺したりしが、大に忿怒し居る様子なれば、之れか対策を講究せり。猶裁法〔縫〕教師関口女史が夫の病氣の為出勤出来る事及組合工女の三穂へ五、田口製糸へ三十名計り備はれ行く由を聞き、又常盤リエの請求にて才治郎へ組合より退職手当金百円を贈り、猶其中より青山よりリエが借金百円を五十円にマケさせて支払方調訂し、才治郎の慰勞金百円の内より五十円を支払ひて棒引となしたり。塩沢春次郎の件及阪井象一の件につき兩人組合へ来り、之を判決しやりたり。午後水城に部落会あり。農會と協同主催にて出席し、一村經濟の大勢より農村としては到底やりきれざる事を説き、自力更生を計るの要を説き、猶信用部、販売部、利用、購買部の事業に付説明し、今後の方針を話し聞かせたり。午後六時帰宅。市場太次郎二十七日の客招に來る。母帰らず、タケノ逗留す。

予記 銀行欠勤。組合懇談会。工場を一方にマトメル事。受信 小塩完治。北原阿智之介。

二月二十二日 水曜

小雨。銀行へ出勤した。其序に聯合事務所に訪問して下田と作興會の打合をなし、原と北原阿智之介の団体長の辞意に付て其の意志を纏さしむべく運動する事を頼んだ。尤も作興會長は是非やつて貰ひ度い

と頼んだ。作興会は事自体が国家的の大問題である、最後迄踏み止まつて国賊を平定せねばならんものである（君主制を廃止し、経済組織を革変せんとする共産主義は国の敵であり不倶戴天の仇である）。彼も自分の家庭の不如意は同情すべき事なるも、此国家の重大問題たけは是非やつて貰ひ度い。

銀行出勤し午後重役会あり。上柳喜右衛門より千代田商会の營業的事務を引受ける話あり。廿五日事務引継の為出張し、西上柳より本家に移す事に付敏雄に電話せり。頭取に行員移動案を示す。宮沢要次郎の辭職聴許に關して話した。銀行も斯くして更生せねばならん。又頭取の無策無能にもあきれてしまふ。屍（尸）位素餐に過ぎない。母飯田訪問より帰宅した。寺所部落懇談会には青山を派して置いた。予記 聯合事務所訪問。北原阿智之介、辭意に付原と相談す。発信 県土木課、権利書の返却を迫る。

二月二十三日 木曜

快晴無風。朝中島と泰治の両耕地惣代が来訪して、南の新道の土地潰地の分筆を稅務署へ届出すべく調印を頼みに来た。面会して書類を預り、松森の問題は此際当方の主張（設計通りコンクリ壁とする）を放棄し、法敷の地代を村より貰ひ、法敷使用願を出して村より無償にて法敷を使用する権利を得置く様惣代が尽力する事に条件して話せり。猶椀屋光治が上氣して居る等の話もありて帰る。父と右書類に付打合せて午前中を費したり。午後一時より耕地集会所に於て農会と合同主催の懇談会あり。出席して組合の話をなす。夜に入りて滝場に庚申講あり。集会所より直に伊沢方へ行き、酔いて歌ひ等して八時半散す。全員出席せり。銀行欠勤せり。組合に居れば銀行とは異り呑気なもの

なり。

北原阿智之助より手紙にて作興会長をやめ度由申来る。受信 北原阿智之介。

二月二十四日 金曜

雨霰。銀行へ出勤す。金田より南倉の手打、岡部氏の来飯の話等ありたり。午前中にて銀行を退出して役場に来る。更生委員会は如何にすべきやと村長に問ふ。名案なければ各地の模様を見て悠々考へるとの話なり。併て村長の土木にのみ専門にして他を顧みざる点は面白からず。漁組の相談役場にあり。田中、熊谷等来り、会するを見る。

城耕地へ懇談会に出席し、報告書を前として貸借対照表より財産目録、損益計算書、剰余金処分案に付説明し信用部、購買部、利用部、販売部に付説明し、本村の經濟状況か倍々借金か兩三年來多くなる点を述へ一考を煩し度と云ひ、製糸部は原料不足にてやつて行くには如何にせはよきやと自覚を促したり。後より農会の懇談会ありたり。酒も出たり、農村娯樂としては酒もよろしかるべし。

北原へは引止の手紙、河野へは榮進祝、上田えは三月中旬再来を乞ふ旨通知せり。

予記 銀行出勤。午後城懇談会。役場にて村長に会、漁組相談あり。発信 河野秀男。上田次郎。北原阿智之助。

二月二十五日 土曜

晴。組合支所に於て専務と事務打合せをなす。正午銀行出勤、山本父来行し居り、蓬山の大黒の画を示して賞玩せり。吉野来行して信濃国民新聞社の出資金を募集し来る。之に応じて日本主義を以て一貫す

べきを論し、村会議員の選挙に於ても亦之によりて終始せよと申す。即ち神集ひに集ひて神詣りに計りうぶすなの神を中心として村の氏の子の繁栄を計るべくやれと云ひ聞かせたり。吉野も之に和して去る。西上柳を訪問して、中山をして千代田商会の事務を本家に引継かしむ。本家を訪問して伊藤立会の上千代田商会の事務を一切本家に引渡さしむ。月末廿八日の対照表を作り之によりて引継を約して、酒肴を供せられて二十八日夜引継く事として、夜十一時三井物産会社社員西川慎太郎、久根下潔の両氏和泉の案内にて来峽し各組合製糸を歴訪したれば、之を飯田駅に迎へ共に蕉梧堂に案内して明日の歴訪順路を打合せをなして夜十一時半帰宅せり。

予記 千代田商会事務を本家上柳に引継かしむ。西川、久根下を出迎。  
【語句の説明】①信濃国民新聞：長野県の地域紙。小須田隆二を发行人とする。月二回、約八百部発行された。

②西川慎太郎・久根下潔：ともに三井物産社員。生糸の取扱いなどを担当していた。

二月二十六日 日曜

荒。雪チラ〜。晴。午前九時蕉梧堂に西川、久根下、及和泉の三氏を訪問し自動車にて直に上飯田組合より片倉、①より松尾組合を案内してミトリに於て昼食を喫し下久堅組合を訪問す。下久堅にては麦酒を供せらる。次に松尾本所に帰りて専務と代り専務は龍丘、下川路、三穂等を案内す。予の主催にて午後六時より仙寿楼に於て歓迎宴を催し来会者二十名あり。盛会裡に過したり。終つて蕉梧堂に贈〔送〕りて夜十一時帰宅せり。宴の初に於て予の歓迎の辞に次で西川氏の生産費を節減して人造絹糸に対抗せよとの話あり。久根下氏は人造絹糸と

天然絹糸の比較をなし、人造絹糸の進歩を告げて天然絹糸の之に対抗策を講ずべきを警告し長々しく話せり。両氏共生糸の安きは米国の経済不況より来ると雖も亦天然絹糸の發達の圧迫もあれば生糸価に付ては悲観的の説をなせり。

【語句の説明】①②…上伊那郡中沢村に存在したマルト製糸場のこと。  
②人造絹糸：天然絹糸の平均価格が七七五円（昭和五年）、五八三円（昭和六年）、六九八円（昭和七年）であったのに対し、人造絹糸の平均価格は一三一円（昭和五年）、九七円（昭和六年）、一二一元（昭和七年）と推移しており、人造絹糸は天然絹糸よりも圧倒的に安価であった。また、日本における人造絹糸生産量はこの時期に急増加しており、生糸生産に占める人造絹糸の割合は昭和元年には三パーセントに過ぎなかったが、昭和七年には一三パーセントに達していた。

二月二十七日 月曜

快晴。水温む。組合支所に出勤す。長野産業会館産業組合新聞と電話にて来る三月六日組合記念日に於て配布すべき組合新聞記事に付て打合せ、松尾組合記事を發送する事となり、事業の統計表と松尾組合の非常時対策と昭和八年度の方針とに付其要綱を起草して發送せり。午後村会に出席し一日を以て村会終了す。別に調査委員を設けず全員にて全部を審議し午後三時を以て終了し、村県社へ奉告しミドリに於て本年は最後の村会議員の宴なれば之に出席せり。清水懇談会には青山専務を出席せしむ。夜太次郎の息良一の結婚披露宴あり出席せり。資産に不相応なる御料理なり。嫁は身長高く丈夫そうなものなり。

此日三井連中は吉田、神稲、大正館、座光寺方面の組合を訪問し、

夜行帰京の筈なる由聞及へり。午後一時より作興会、郡農会等の主催にて商業講堂に於て経済講演ありたるも出席する能はず。風邪の気味にて頭重し。

予記 村会。組合新聞投稿。安〔阿〕倍賢一博士経済講演。清水部落懇談会。市場太次郎祝儀宴。

受信 小松氏母堂の訃音。

【語句の説明】産業組合新聞…産業組合新聞社が発行する新聞。旬刊、一ヶ月五十銭。

二月二十八日 火曜

快晴。春風南枝綻ぶ。朝は結氷して寒気は強けれども日中は温暖なり。風邪の為め終日臥床す。銀行も組合も欠勤する様届置けり。八幡の部落懇談会も専務をして当らしむ。太田藤太郎来訪し父と書画交換し行けるもの、如し。仙厓の達磨の画を父か予に病を慰めるため一幅買入れ示されたり。床にかけて眺むるも偽物らしき所あり、達磨の画も出来よろしからず。讀は上記の通。大沢茂尾女史も増恵を訪ねて来訪し話し行けり。予は之に面接せずして悠々静養す。雉をかひて日和に平和慶春をむさばれば心悠々たり。

仙厓鴻山の画帖をとり出して見る。鴻山の怪物の画は世を諷したるものならんも美術としては面白からず。中島、泰治兩人来りて道路潰地願を税務署に届出の調印を得て去れるもの、如し。予は面会せず。

小松茂治老母死去の通知あり。香奠金一円を贈る事と、信也をして見舞しむ。

信也に農林省就職の状況を報せしめ、且世は口の人に非ずして腕の人を要すと申送りたり。

予記 悠々風邪にて静養。

孤舟浮海神州遙

隻履蹴天葱嶺高

莫道東西十万里

祖師来不隔秋毫

仙厓

発信 小松茂治。信也。

三月一日 水曜

晴。朝銀行へ出勤した。南信倉庫を売ったので其後始末に付伊藤兵三や鈴木正直が来た。それから倉庫の清算事務として公売する事として其公告を出した。頭取は上京して高橋練逸氏に対して救済を懇請する事となり、夜行上京に決した。予は午後明の組合懇談会に出席すべく退出した。明の話は風邪の為か余り上手には出来なかつたが、主に組合経営の方針と村の経済力に付て話した。猶精神的には報徳主義を採用する事、日本独自の見地より産業組合も進むべき事に付て気を吐いた。午後五時半終了して帰つた。予の胸裡には来年の組合役員改選期には如何にして組合から逃げ出さんかとの問題が往來した。組合の前途は糸安から危いものである。村の経済も亦将来は悲観の材料の多い。之を如何にするかは由々しい問題だ。誰か局に当るとも、ともすれば組合を破滅の淵に投するであろう。一日も早く足元の明い内に逃げるより良い策はないと考へた。又減釜を如何にするかに付ても考へさせられた。第二工場を生かすより外致方はない。予は組合の重大問題は組合長独自の断行より外にはないと決心した。

予記 銀行出勤。明懇親会行。風邪全快するに至らず。

三月二日 木曜

晴。銀行に出勤す。午後千章来行して面会せり。石原も亦来行して、彼か塩沢春次郎より買入れたる土地に付て金田と話す。既に此件は訴訟によりて解決し、現金をうけ取りて解決済みとなり居る事を話したり。午後三時代田集会所に行きて懇談会に望〔臨〕む。組合員は勝手気俣の言を弄し、組合は如何程でも金を借りて組合員を救へと迫りつゝ、ある様なり。江塚も鋤柄も工場の減釜の必要を説き、第二工場へ集中するより外なしと大胆に切り出せり。予も亦之に和して種々組合の昭和八年度の非常時策に付縷々述へ、組合員の了解を経たり。此懇談会に於ては今迄行ひたるより最も有意義なりと思へり。予は共存共栄の組合精神を説き、信用部、購買部（現金制〔〇〕）、利用部等につき話し、方針として貸付金は予〔預〕金の2/3とせん十年経〔計〕画に付話したり。種々勝手なる質問ありたるも、要は不況か組合と組合員と離れると云ふ事に付ての話なりしも、組合の生存上止むを得ずと内情を話せり。大に組合員も了解せるもの、如し。

予記 代田懇談会。

発信 加藤完治。来峽の礼。

社会の今日 熱河討伐進捗し、毒瓦斯の為百名余やられたり。

三月三日 金曜

晴。銀行欠勤。組合へ出勤して第二工場に於て充分役員会の件につきて相談し、来る紀念日を乗り切るべく前役員会の決議を保留する必要ありとして遂に役員会を開く事とせり。併して工場の第二工場設置は如何にしてもせざる可からざる事なりと予も考へ、江塚も之を主張したれば、背水の陣をししく心地にて事に当る事とせり。併して午後本

所より毛賀集会所に行き、部落懇談会に列す。予は組合が常に組合員の福利を増進すべくつとめつゝ、ある事を説き、協力一致、村の経済の更生に努力せん事を慫慂せり。終つて帰宅の際、江塚、鋤柄忠二郎、塩沢、鋤柄両人と鳥清にて夕食をとり、懇談会の終了の慰労宴を開く事とせり。種々問題起りて脳中如何に処すべきかに迷へるもの、如く、只没落せざる様にとむるの外なしと心かけたり。

社会の今日 熱河占領。

三月四日 土曜

晴。朝銀行に向向す。耕地の農家組合の連中六、七名耨摺機購入の爲上飯し、其一行に会い、共に望月農工店を訪問せり。銀行に帰りて午後二時迄執務して午後二時より組合役員会に列す。役員会にては工場統一に関して研究し、特に組合紀念日に於て種々の問題発生してはよろしからずとして、此件は研究中と云ふ事にして紀念日を乗り切る事とせり。而して此工場統一（第二工場）説は江塚か最も之を力説し、万難を排しても第二工場に統一するをよしとすとの説を固持しつゝあり。結局此議に関しては信用購買事業等全部本所へ移管し、只単に工場のみを第二工場に於て取扱ふ事として之を決する事とせんとの説もあり（佐々木、一瀬）、種々購〔講〕究したるも、之を留保して後に研究する事とせり。再三上飯して仙安に於て野原友三離縁問題に関して林、松下、大原、前沢、池田の五氏と余と交りて野原文四郎より如何にすべきかとの事に関して相談する事となり、友三は加藤氏国民高等学校へ派遣する事、羽仁もと子を招聘して順の心持を問ふ事とせり。十時半帰る。

予記 尚夫病氣にて藤田医師の来診を乞ひたるも別に肋膜等の憂なし

とて元氣恢復せり。

三月五日 日曜

小雨、晴。中学卒業式に招かれしも行かず。敏子来訪し一泊し居れは其の嫁費に付相談をうけたり。七々久保松村によき娘ありと〔の〕事なれとも充分人物の如何を近傍にて問合すべしと忠告せり。午前十一時組合支所に行く。専務、江塚兩人居合せて種々話せり。明日の紀念日に付其模様を見て三時帰宅すれば市村威人來訪し、得替記と篠屋日記を借り度由申来る。面会して伊那史料叢書等につきて語る。犬塚利国も亦来る。父が上柳喜茂の依頼により敏雄を召致して家政上の事に付て意見を交換する筈なりしも敏雄來訪せず。父は大に忿怒し誠意がないと云ひ居れり。予は空しく家に居るを快とせず、牧内を祝儀後訪問して其状況を見んものと午後五時より出發して之に參せり。伯父と嫁とのみ居合せて歓待につとめくれたり。午後九時辭して帰る。組合の工場合併か或は現在のまゝ、やるかは心すべき事にて、理論上よりせば第二場へ合併して之をなすか最もよき策なれとも、非合理的には種々の苦情ありて、此際旧のまゝとして幾分の改良を施して施行するを尤も無難かとも思はれたり。

発信 信也。吉沢武夫。友三の件に付面会したし。

【語句の説明】①得替記：『信陽城主得替記』。戦国末期から江戸時代にかけての信濃国内における武家の興亡盛衰を叙述したもので、「得替」とは領主、代官の転封、交替を意味する。

②篠屋日記：篠家日記。国学者の服部昔雄が文政元年に飯田を遊歴した際の日記で、服部が森本家に長く滞在した記念として同家に残されていた。

三月六日 月曜

曇。組合紀念日にて銀行を欠勤して産組へ出勤せり。此日午後一時より総会開会の筈なりしも、遅れて午後二時より開かれたり。原幹事長來組、助役、小学校長も亦來れり。予は開会の辭に全国に此産業組合か勃興したるを賀し、我組合が大正八、九年の好況を経て昭和六、七年の不況時を突破したる組合員の協力を謝し、非常時八年の内外共に多事多難にして殊に村の主産業養蚕業か米国の不況により浮沈の岐路にある事を説き、組合精神によりて一致協力により更生を計れと結へり。原幹事長の講演は組合精神より郡下組合製糸を打つて一丸とするの急務を説けり。小学校長は門外漢として組合精神と教育とを説き、名演舌をなせり。今日の講演は実に五味校長の上出来なりし。「松尾精神」「組合（勞力奉仕）、銀行と組合取付等最もよし。本日の総会は有意義なる総会なりし。宴には竹皮包と二合の瓶詰とにて充分に酔いて、満足して組合員帰れり。」米國銀行モラトリアムの報伝はり、我國の取引所皆停止せり。米國の此恐慌により我蚕糸業の一転機にて実に重大なる紀念日なりし。産業組合新聞に松尾組合の記事出てたり。予記 組合紀念日報告組合大会開かる。有意義なる総会なりし。和氣満々として宴によるし。\* \* \*來訪して毛賀の件話あり。

受信 信也。久保田。社会の今日 米國大恐慌。金輸禁止伝はる。我取引所停止。

三月七日 火曜

晴。銀行へ出勤する前に常盤館へ泊つて居る県組合課技師の安達を訪問して、曾て提出した下伊那製糸組合の合同統一問題に付て県の方針はどうだと質問した処が、安達は諸君の提案によつて進むと答へた。

又松尾組合の工場統一に付ては、若し之が出来ない時は非常手段に訴へると云ふ事も話した。それから又吉野館に泊つて居る目下監査巡回中の安達に会ふた。併して定款変更につて、除名処分の時払戻をせぬと云ふ一段に付て県の了解を得るべく運動した。若い小僧であるので、是非理事の立場から此際出願通り許可してもらい度と迫つた。それから銀行へ出勤した。福島淡から佐々木光雄の窃盗事件の話があつた(電話で)。それから銀行に出た。放課後になつて金田と話をした。頭取の天気師である事や銀行経営につて何等経倫(論)のない点等も話した。併して自分として少しも営業と云ふ事につて趣味を持たない事も話し、重役会を急に中止した。之れは頭取か上京して高橋氏には会ふたか何等得る所がなかつたとの話に、それでは重役会を中止した方がよいと云ふ事になつたのである。

那農会にて蚕糸研究会に欠勤せり。下伊那の組合製糸を生かすには工場統一より他に方法なし。

予記 米国の金輪禁止。

社会の今日 米国大恐慌伝はり蚕糸青む。

【語句の説明】定款変更…松尾村産業組合の定款変更のこと。特に、組合員の脱退・除名時の持ち分の払い戻しに関する条項(定款第九十二条)が争点となつていた。従来の規則では、除名時には払込済出資額の半額を払い戻すこととなつていたが、森本らは、除名処分となつた場合には払い戻しを行わないよう改正することを目指していた。

三月八日 水曜

晴。毎朝結凍し寒気強し。父に銀行の月僱人物風景画を示せり。組

合支所に向出す。吉川、江塚、金井、木下各理事来り合し雑談を催す。定款変更につて県より付義の件につき久保田に問合せたる処、杉原課長に直接私信にて兎に角認可を迫れとの事に付、認可を是非此際して貰ひ度由申送りたり(私信を以て)。上飯し銀行出勤して頭取と高橋氏の意中につて検討するに、高橋氏は此銀行の為に世話を見る意志ありと頭取は確言せり。依て其れに付如何にするかと訪(尋)ねたるに、熱を以て動かすと云ふのみ。別に彼に無策なり。頭取の無方針無策を表はして面白し。銀行にて片桐稲人に会ひ氏乗車の差押事件につき話合せたり。放課後大雄寺を訪問す。大雄寺は先方が忌明にも招待せず当方よりも年首に行かず。寺の檀家に対する態度よろしからず。去りて年賀に行くと父より申渡されたれば年賀に行く。信濃梅五〇銭を持参せり。良孝和尚も未だ禪風出来ず未熟ものなり。

予記 米国の金輪出禁止につて蚕糸の暴落を予想せられ、予は之と人絹の圧迫の為蚕糸は窮地に陥るものと思へり。

発信 千章。信作。

受信 福島佐太郎。

社会の今日 米国金輪出禁止に伴ひ蚕糸の暴落を予想さる。

三月九日 木曜

晴。寒中のシミなり。流水凍る。朝中島、泰治二人来訪して、原紙会社対策問題起り今日鼎役場に於て鼎、松尾、上郷の三村集合して対策を講ずる筈なり、如何にすべきかに付話ありたるに付、老師迎出向前なれはとて短時間話す。則ち中島に一任す。費用は負担止むを得ざるべし。以前の時は鼎四、松尾四、上郷二の割合に負担せりと云ふ。之れは村にても何とか心配せしむる要あるべし。併し会社をして費用

位は出さしむべし。老師朝八時半八幡駅着に付出席へたり。石原、市村、高橋等出迎、龍門寺少憩の後（宣伝札を配る事とし丸形屋へたのむ）午前十一時上飯出勤す。上松彦太郎来行し友三の件を話す。野原の方に上げたる俸なれば如何様ともせられ度し。但し野原の許可あれば別に当方よりは何の注文もなしと。放課後課長会議を開きて「銀行が自力更生によりて起ち□〔直〕らんとするに際して如何にすべきかに付研究せり。又其他県に対する運動に付ても種々話せり。午後五時龍門寺に茶礼ありたるも七時に遅れて行く。喫茶して去る。松沢、柴田、小島来行し大王寺の女学校式〔敷〕地を売りたる金を保管に付論す。

予記 十二日に大王寺に会して和尚と相談すと云ふ事とする。敏夕刻来訪す。松村縁談駄目。

発信 友部高等農民学校規則書をタノム。

受信 河野秀雄、就任報。久保村行彦、辞任報。

社会の今日 熱河既に平定せり。米国の恐慌満蒙に有利。

【語句の説明】原紙会社対策問題：下伊那郡上飯田町字松川に所在した飯田元結原紙会社が松川に流した汚染排水により、稲作や養鯉に被害が生じ、松尾、鼎、上郷の周辺三村は対策を迫られていた。松尾村は、排水により被害が生じた場合は営業を停止するとの事前の契約に基づき、原紙会社に営業停止、あるいは移転を迫る方針をとった。

三月十日 金曜

曇。朝四時起きて龍門寺接心に行く。暁天の喚鐘に飛込む。牛過窓櫓を負ひて突入す。未だ案未熟、直に撃退。午前六時県社集合の模疑

〔擬〕充員召集に参加す。八割の出席。小学校庭に下りて密集教練を行ひ散す。再び龍門寺に入る。丘山和尚と大雄寺々有財産の管理に付和尚の意見を問ふ。意見としては別になし。併し大雄寺良孝和尚の不明を惜む。

午前九時銀行出勤。正午上松友三来行して面接す。彼に修業の為外遊を懲瀆す。彼は別に自己の進路を開かんとせず、空しく喪狗の如くフラ／＼し居れり。其の結婚当時野原にて資産を二分すること、相続人になると云へりとの事等話あり。彼に外遊をす、めたり。彼も其の言には耳を傾け異存なきか如し。両三日中に返事を得べく注文せり。林雅治に友三外遊上京し修養するとせば其費用出所に付、林と野原を勧説する約を電話にてなす。放課後銀行より龍門寺に帰り前話を呈す。二度入室したるも同様撃退、白隠の軽々に見るべからずとの事を聞くのみ。夜九時帰宅して「瑞松点滴」を父に示す。之れは瑞松老師より贈られたる書なり。

予記 接心初〔始〕まる。十四、五人来会せり。

社会の今日 陸軍記念日。蚕糸境の革命。

三月十一日 土曜

降雪五寸。夜来の雪積る事五寸、稀なる大雪なり。午前四時起きて龍門寺接心に行く。「牛過窓櫓」の則を以て老師に迫るに、鉄門堅く鎖して近前する能はず。二回の参禅空しく撃退。銀行に出勤し午後五時迄勤務す。犬塚来行して種々話す。遂に龍門寺には至らず、連日の朝起きにて疲労したれば理髪して帰宅せり。夜所得税調査に付申告をなして申告書記入をなす。父の申告綴にあり。無門会参会者数多くして年々大衆予想外に多し。十五、六名は来会するか如し。松沢源治よ

り電話にて、明十二日大雄寺和尚と会見の件中止せりとの報あり。右は女学校へ売却したる敷地代一万余千円の子〔預〕金を和尚と惣代と二者にて保管せしめ、利子を以て営膳〔繕〕費に充てんとせるものなり。之に對して和尚頑として聴かず。此和尚財的に失敗する和尚なり。夜に入りて読書せしも疲労出て十一時眠につく。

受信 信也。

社会の今日 独逸ヒットラー政府共産党退治はよし。

三月十二日 日曜

晴。朝五時龍門寺に参詣せり。牛過窓櫺の話未だ過ぎず只元の通りなり。併し一步つ、近付くか如し。朝九時組合にて大沢茂尾に面会して、婦人会にて主催となり、作興会か聘せる上田次郎氏を聘して講演を聴取する事に話せり。大沢女史喜ひて諾せり。帰宅して信也よりの手紙を見るに、国民高等学校へ入学せんと（若し農林省就職失敗の時は）。其の入学願を差出すに付、捺印を願ひ来る。予は信也の宿願の通り農林省就職を極力試み、ダメなる時は国民高等学校へ就学すべしと教へたり。午後二時提唱を聴くべく龍門寺行。再び参つて同しく敗退せり。渡辺薫美の話道友間に出つ。彼は一隻眼を具したる禪的男子なり。彼に付ては世に種々の批難もあれとも、彼は確に傑物なり。理想高くして現実に乏し。後世彼は唱へらる、事あるべし。薫美をして寺を持ち老師として入室参禅すれば活禪となるべしと思ふ。

午後五時喜代ムコ邦保を招きて御馳走せり。

龍門寺行を止めて家に止む。

予記 接心。喜代召待。

発信 大原岩男。成の娘の間合。

【語句の説明】 渡辺薫美：思想家。大正九年頃から横須賀に家塾を開いて国家主義的な思想活動を行ったほか、貿易会社・天華洋行を率いて満洲との貿易事業も手掛けた。著書に『大和民族の使命』や『新生日本』など。

三月十三日 月曜

晴。朝四時龍門寺接心に参し、牛過窓櫺の則を以てするも「牛」少しも過ぎず、老師に叱咤せらる、も何の好転を見ずして終る。午前中一度家に帰り信也よりの通信を見て、再び組合に行き江塚、青山と共に組合の事務を打合せ、来る十七日岡谷増沢と交渉して後、夜行上京する事に決せり。正午役場に行きて信也戸籍抄本二通を作製せしめて、之を信也に送る。信也之を以て国民高等学校へ入学せしむるものなり。又所得税の申告書を出す。父と子の分を合せて出せり。午後一時銀行に出勤す。銀行にて思へらく、予の如き銀行業務か暗きものが事務等をなすは危険なり。故に時期を見て退にしかずと思へり。久保田某の売立仙鶴に開かれ下見に行く。目にとまりたるは竹の唐物花生、蓬山の秋月と萩の画のみ。帰りて父に此売立の相談をせんとし龍門寺行を止めて帰宅すれば、父病氣よろしからず臥し居りたれば、之に下見の模様を話しきかせたるに父も大に喜び病を忘れたるか如し。

塩沢治雄に糊摺機補助申請をたのみたり。

信也徴兵猶予事故止届出を出す。

予記 龍門寺。組合。信也抄本。銀行。売立下見。カゴを犬塚に注文す。

発信 信也。戸籍抄本。

三月十四日 火曜

晴。朝五時龍門寺に行きて「牛過窓櫺」の則に付見解を呈す。依然として不動。天地一枚の白牛となりて示せば老師例によりて大声叱咤するのみ。除るに顧みて脚下を見、後ろを見るも通せず、急に追出さる。使者あり、午前九時市瀬牛太郎外五名の手紙を持参せり。九時ミドリに会合すべければ来られたし。何の事か分らず、則ち組合に來りて専務に話す。専務も不明。協議事項は組合時事問題のみなりと云ふ。其内に農学校生徒來り、組合の状況に付て説明せよと云ふ。一場の講話をなす。組合の事業に付て説明し、指導精神は「共存同業」は勿論なるも報徳主義を以てすと説明す。又予の数学の問題「一日一円、一ヶ月三十日働」の問題を提出して生徒を試みるに健実なり。此の堅実性を喜ぶ。部会西村來組して表彰の話あり。之を決し然る後ミトリに出向す。吉川、田中、江塚、金井等居りて、吉川より江塚の口を代表して「組合が現時工場統一問題に付行つまり居れり。如何にするか」と話あり。予曰く「案なし。」「其れは役員熱心か不足するから其熱を以て毛賀組員を説けば承知すべし。」予は「役員熱心か出来ればやる。併し其の役員熱心は、役員を統一させる案ありや。」「熱と組織を製糸部は独立して一役員に任せてやれば毛賀も承服すべし」と。予曰く「然らばそれを提案して役員一致を得る勿論辞する所にあらず。若し事成らずんば処決するのみ」と相談を定めて、部会製糸統一研究会に出席す。統一（七ヶ工場）の有利なる計算を久保田提出せり。之を見るに計算は結構なり。併し感情上六ヶ敷点あるべし。之を何とするかとの問題あり。之を講究し又予の持論なる原料問題より入るべしと説明せり。組合支所へ歸りてミトリの件に付専務と相談す。到底専務は毛賀をまとめる事は至難也と承知。江塚は工場

をやつて見たき料見あるもの、如し。

予記 銀行欠勤。

三月十五日 水曜

晴曇。朝組合支所にて井深と会见す。増沢手金問題に付ては六ヶ敷、老人居らぬ時の方か話かなしよろしかるべしとの事に、然らば横浜より歸りに立寄るべしと告げて分れたり。龍門寺無門会接心会后、片付の為龍門寺へ行く。大般若あり。午前中決算會計勘定にて市村、高橋と決算を了し、老師に相見して報告したり。老師より「碧松点滴」を貰ひたる連中は金五十錢宛を康（拋）金して胡桃五円を贈れり。併して後銀行出勤したり。商業會議所滝口を訪問して、新聞の中島屋上へ移転の実否をたゞす。銀行終了後、竜門寺に於て会し、組合の従業員法要を営む。役員も出席せり。午後九時終了して、再び支所に於て原紙会社問題に付委員及井世話人会同し居り、出席す。此問題は以前より鳴り居りて、同会社か悪水を松川に放流するを以て稲作、養鯉に害あり、以前契約によりて若し之等に害ある時は営業は廃止する旨を決し居れり。故に其の契約を迫りて止まず、当村よりは青山、塩沢英治等委員となり居りて、数日前より交渉し居れり。其結果、野原文四郎、松下修一郎の二人中間に入りて口キ、をなしたり。其結果、松尾は村に於て委員を挙げて之を処理する事となり、予は自重して出です。村長を之に当らしむる事とし、井世話人は会社に対して事業休止を迫る事に決したり。委員としては田間善治、塩沢新九郎、今村与一出席せり。予は訴訟迄行く事を覚悟せざるべからすと告げたり。

〔欄外〕大綱和尚の一行「太平一曲大家知」を久保田の売立にて買入る。

発信 山本。下男を一五〇にて頼む。  
社会の今日 組合の工場統一問題八カマシ。

三月十六日 木曜

雪積五寸。朝より降雪、積る事五寸。組合支所に於て役員会を開く。工場を支所に統一せんとする案なり。到底六ヶ敷かるべしと思ひしに、吉川順治郎の奔走により一瀧千里に運ひて、本年非常時に限り工場を支所とし本所建物は其俣とすとの事を決したり。細々連判状を造り記名捺印を了し、此日の結果によりて今迄役員会にて決せざりし事かよく是迄に決心したりとて大に喜ひたり。代田より電話あり、千章名大医病院にて大病なれば赴かれたし、之を他の親戚にも知らせられたしと。依て席史郎及山本へも知らしめたり。席史郎は兄弟の義務として同行すとして同夜行にて出発せり。組合の用件にて出浜の序なり。辰野にて一行と分れて席史郎と二人にて名古屋に急ぐ。心中に千章の病氣全快を禱る。

三月十七日 金曜

晴。朝六時、席史郎と共に名古屋着、医大病院に千章を訪ふ。本月十日頃中津より名古屋に出て岡崎に熊谷伯母を訪問せんとし、仲神を名銀に訪問し昼食して歩行中腹痛を感じ、直に名大医内科に入院し十三日外科に移りて手術せりと。其の結果三時間を手術に要し、腸に大腐蝕ありたる由に付到底快復(復)はダメなるべしと席史郎と予を枕元に呼びよせての言に、「そんな弱音は聞く耳を有せず。名古屋にて発病したるか幸なり。国許ならば治療ダメなりしなるべし」(一)と告げ其様子を見るに、二、三日中に死亡するか如き容子もなければ、予

は所要あり横浜に相手待ち居ればとて午前八時の汽車にて暇をつけて去る。

千章の手術を恐るゝは甚しく、又生死に超越せざる事も亦甚し。よつて彼は早世したるべし。彼に貸すに宗教的信念を以てせは立派なりしなるべし。

三月十八日 土曜

晴。朝かや旅館に下久堅の連中、即ち佐藤及桐生と談し、予は午前十時頃奥村商店を見舞ひたり。併して正午東京に兩人と共に引揚げ駿台荘に入る。共楽美術倶楽部の事を思出して見物に行く。良寛の書、沈石田の山水、山陽賛の画等あり。陸相荒木の書一行等入札して帰れり。午後五時信也を宿に招致して卒業後の方針に付て話す。彼は農林省へ就職して月給取生活を営まんと志し諸方へ運動し居れり。予は寧ろ堅実黙々として大地を踏みしめ耕す農夫を育せんと志し友部の加藤氏の許て教をうけん事を慫慂せしも、自ら農林省を望み、之れは其志に任し第二方針として友部をすゝめたり。種々話して午後九時分れたり。

三月十九日 日曜

晴。駿台荘の一泊暖にて寝心地よし。朝九時信也、勝男を伴ひて来訪す。(以下、五行分削除) 午後上野松阪屋見物に行き、カステラを買ひて病氣見舞として犬塚のバツの死を白梅園に吊ふ。再び共楽美術倶楽部に向向して売立を見、五、六点の入札をして帰る。夜銀座裡多幸にて夕食を喫して再び三人にて駿台荘に帰り十一時迄話して、十一時上野発にて長野に向ふ。雨降り出したり。車中眠られず。

予記 犬塚のバ、死を吊ふ。

三月二十日 月曜

晴。上野より夜行にて朝七時半長野着。車中割合にコンテ寝る事不足す。駅前にて朝食した後、県庁産業組合課へ出頭し木下氏に会い来意を告げたり。即ち予而当村組合にて惣代会に於て決議したる除名者に持分払戻を為さざるの件認可を乞ひ度し、理由としては定款に罰則の要ある事、実際問題として払戻は稀なる事、除名するは組合を浄化するの要ある事、等を説き認可を願ひたり。杉本主事にも其話をなして、了解を得て帰る。午後五時頃帰行し、銀行に立寄りて午後六時帰宅せり。旅行中の状況を父に話し、共楽美術倶楽部に於ける売立に付き話せり。旅行中疲労したれば寝に付く。

予記 長野組合課行。

三月二十一日 火曜

晴。朝電報に起されたり。披見すれば「千章危篤」を報ず。驚いて組合に至り、山本、席史郎等に報して知らしむ。午後一時半、大平峠越にて再び出名と決す。組合に至りて用事を専務と話し、増沢商店降旗と話し帰宅し、旅装を整へて午後一時半大平峠越にて出発す。出発の際、山本兄の宮田へ行くのに会い、又佐保の席史郎より手紙を持ちて使に來れ「る」に會す。大平峠雪溶けて道薄深く動揺甚し。午後八時、名古屋医大の病院に着。死亡室に安置せられたる千章の冷き骸に接す。冥目焼香す。市岡診介來り居り、又宮田より子供三人、召使二人、山田某、木綿屋主人、宇吉等愁ひ氣に片付つ、あるを見る時、涕ボロ／＼下る。病院の白きペンキ庭の灯に光りて白玉楼中の人を思

はしむ。其夜直に茶毘に付し翌朝八時骨揚する筈。

宮田の一行は①へ泊り予は父と共に大松宿に入りて泊す。其夜信作も來り、診介來り、久し振りにて会食せり。昔を語りて面白し。

予記 千章死す。

【語句の説明】①：名古屋市中区駅前明治橋南入で營業されていた旅館「丸八」をさす。

三月二十二日 水曜

晴。名古屋大松旅館に泊し朝八時②旅館に泊りたり。宮田のものは骨揚に行き、大松に泊したる父と信作と予とは遅れて駅前③旅館に入り待ちしも遂に骨揚の間に合はず。午前十時発にて一同帰途に付き、山本父と信作は居残りて仲神、市岡等の親戚に礼を述ふるべく残り、他は帰途に付き予も遺骨を送りて宮田に來る。辰野より自動車にて宮田着。辰野辺より雨降り初「始」め春雨そほ降る中を夕景宮田着。宮田の村人多數出迎居り積善の家に有余慶を思はしむ。汽車中子供等三人喜々として戯れ其の有様を見れば涕の種ならさるなし。遺骨家に帰れば見舞人及家族一同嘘啼してワット泣き出し幽愁の場面泣かしめられたり。上松アチ來り居り後藤大助も來り居れり。山本兄來り居らざるは物足りぬ憾あり。其夜は通夜して泊る。

予記 宮田親戚のものは山田、木綿屋、小平君子子供三人、召使二人。千章遺骨宮田に帰る。

三月二十三日 木曜

雨。宮田代田に後藤及あちと共に泊す。山本より兄來て居らされは其代理となりたり。雨降り居りて幽愁遠し。見舞に來るもの多し。併

し其千章を論するもの皆快よき人物にて彼か人と交るに當を得たるを喜ふ。曰く友人千章に云はく「君はウンと早速云はぬ処に欠点あり」と。千章曰く「早速ウンと云へは皆暫の毛迄ヌカレてしまふ」と。其問答面白し。朝十時後藤及あちと共に帰る。あちは尚残留するか如き気配なりしも連れて帰る。銀行に出頭せしが疲労し居ればとて二時間計りにして辞して帰宅す。父母に千章死亡の模様を報告して床に入り休養す。造船なる骨董屋来りて父と話し行けり。尚夫鼻を病みて飯田病院に至りて診察を乞い帰る。予は入院する程度に非すとて内科診察を主張せり。帰り来れば組合の工場統一問題騒ぎ居る由を聞く。併し単に風評によりて総辞職をなすは面白からずと考へたり。統一を投げかけて其形勢を除ろに見るにしかず。

受信 野原友三。(修行に行かすと)。

三月二十四日 金曜

晴。銀行へ欠勤届を提出してをいて組合へ行つた。支所で青山専務から製糸工場を第二場のみに移すと云ふ事を決しておいた筈の各部落との懇談の結果に付き、既に役員会に於ては連判状によりて第二工場へ決定したるに付、城にては彼岸遺作の節此話出て、耕地の決議として理事を辞せしむるのみならず総代も皆辞すべき事の決議をなし、毛賀にては到底此の如き役員会の決議には決して服従出来ないとの事なりとて案外したる結果、急使役員会を開く事に決し本所に於て役員会を開きたる結果、城、毛賀は到底決議に賛成すべくもなく代田も亦反対の氣勢あり、依て機を見て連帯辞任する事に決し兎に角製糸部の決算だけは終る事とし廿九日製糸部決算総代会を開く事とせり。相談夜及び江塚佐三郎の主張か却て此の如き結果を生ずる事となりたり。

清水は佐々木から了解を求めたる結果第二工場説に賛成したりと云ふ結果となり、進退兩難に陥り役員不統一の結果辞任する事となりたり。尚夫病氣にて鼻の病ありと代田博士に診察してもらいたる結果治療する事となりたるも、予は之に賛せず他に病氣あらんと断じて延引せしむる事とせり。代田博士に電話にて問合せたるにヒコーセイ鼻炎との事なりし。

予記 銀行欠勤。組合出勤。晴男法事あり母出向。尚夫鼻病なりとてマコック。  
発信 信也。小松茂治。法事の礼。

三月二十五日 土曜

雪。積らざるも終日よく降る。組合長会議あり。午前中より出席す。午前中は工場統一を実行案につき協議を促進し、午後は部会の総会あり。部会予算決算を議し表彰あり。終つて仙寿楼にて宴会ありて出席して雨の中を帰宅す。組合にては市村民次郎被彰せられたり。仙寿楼に於ける彼の挨拶実によくまし。銀行を欠勤す。松下修一郎商工会議所を中島屋本店上に移すと主張し、松下之を委員に付託せしむる様話あり頼み置きけり。父追々衰弱せる様見うけられたり。

予記 銀行欠勤。  
発信 市岡診介(久闊叙)。信也(帰宅セヨ)。

三月二十六日 日曜

曇雨。組合へ行く。本所にて決算に付、石原監事不在に付塩沢三吉決算を監査して来て総代会に於て監査報告をなさしむべき件につきて予も立合監査をなさしむ。談遇ま工場統一の件に及び、毛賀の区か之

に反対する理由なき事を塩沢も主張し居るも、立入りて之をなだめる事もせず傍観の体なり。下男を雇入に付き先般来山本に頼み置きしも給金当方主張一五〇、先方一八〇にて交渉破れたるにより更に他を頼み貰ふべく手紙を尚夫をして持ち訪問せしむ。尚夫山本泊り不帰。父近来体力衰へたるか如く時々床中に入り休み居れり。種々用件にて父の近側に待して居る程にもなければ東奔西走しつゝあり。

工場問題に付き青山は江塚の言動に不満をいだき、江塚が無責任にて平和的解決案を寧ろ工場統一の純理にかられて暗礁に乗上げしめたる発頭人として取扱ひ居り、予は此の純理派に味方して是れ迄来れるものなれば、一面より見て江塚にやられたりと青山は云ひ居れり。山本へ尚夫を遣はし下男を頼む。

予記 松川原紙会社問題にて青山、今村与一郎、塩沢英治来組し居り。軍資金百五十円借入たり。

発信 吉田初次郎。礼。上田次郎。講演の礼。

社会の今日 連盟脱退、勅語を出されたり。何故に之れが弘通を講せざる。

三月二十七日 月曜

雨。千章葬式に付午前八時十四分八幡発にて生花（兄弟中より一对贈る）を持ち出て出張す。途中席史郎も同車して宮田へ午前十時着し見れば旧習によりて出入近隣の者沢山（百人計り）居合せ、造花も六、七点花輪ありたるも生花は兄弟中より贈りしもの一对のみにて場面よろし。葬別は雨天の中を午後二時進み、予は湯沢氏と共に天蓋を持たせられたり。寺の本堂前泥濘にて如何ともすべからず気の毒なり。式終りて拝して帰る。北原夫妻、竹村夫妻、席史郎も佐保を伴ひ会葬し

居れるも予のみは一人なり。混雑の家の様子之を統轄して行く老婆の心中も雄々しくも亦哀れなり。夜九時にて席史郎、北原夫妻と帰る。香奠五円贈る。下男の話を山本兄となす。百六十円にて雇入方を頼みやりたり。下男貢本日計算して帰らしめたりと。

不在中祐助、松岡屋及伊那町三人連れにて来訪したるも父は面会せざりしと云ふ。

小塩録郎、祐助、木下三也俸来訪したるも父気が悪しく其俸帰す。

予記 千章葬式、涕新也。

三月二十八日 火曜

晴。春暖の気加はる。併し四囲の山は雪深し。父と毛賀の話及下男雇入を山本へ頼み給金百六十円と定めたる事及貢の代りとして正来る事等を話す。午前十時組合支所に行き銀行へ欠勤届出て後犬塚祐吉妻の葬儀を見舞ひ、初七日の砂糖を貰ひて正午本所行。午後一時よりの総代会に望〔臨〕む。総代会は製糸部決算に関する件にて原案通り通過したり。改選後初総代会なれば一献をかたむくる事とせり。総代会終了後毛賀木下を訪問したるに祐助不在、光弥出て来りて茶を出し、彼が胃病、腎臓病、盲腸炎等を全治せしめたる山吹小平医師の養生法を聴けば道理なる事多し。西洋医学と日本医学との相違を物語るものにて小平医師は日本医学の大家と思はる。果して彼は難病を治療して身体愈々健康になれるもの、如し。（以下、二行分削除）弗然として帰宅す。組合の工場問題愈々第二工場統一の路に進むが如し。

予記 竹村要人、江塚佐三郎の両名出張。吉川と共に原紙会社の件陳情する由。蚕糸業対策郡民大会開かれたるも組合の総代会の為欠席せり。

受信 松沢大治。退職。

三月二十九日 水曜

晴。春寒く結氷多し。久し振りにて銀行出勤せり。会議所中島屋へ移転するとて予に面会を求めたるに付委員松下、杉山等に面会せり。曰く(一)二、三階共貸与せられたし、(二)二階便所を使用せしむる事、(三)畳廿丈敷を造られたし、(四)音響防止の設備を行はれたし等なり。相談の結果年額二五〇円として之を使用せられたしと申込む事とせり。放課後金田に予の立場を話し銀行を止めて組合専念に尽し度と話せしに、金田は従前通りを主張し予を銀行の首枷より離脱せしめじと計る。併し予は此際銀行を止めて組合の為に尽さず、れは予の一生を誤るとなし、後任を井村成治氏に疑〔擬〕して之を逃れんとし、て計画する事とせり。金田は組合の方を止めて銀行に來いと云ふ。一時間計り話して帰宅す。祐助より手紙來り、三十日夜來訪する由申來る。組合と銀行、其の間に入りて進退谷まれるも、断乎として銀行の首枷より免れんと計画せり。時機大によろし。橋爪和一よりも又重役幹部の処決を促して來れり。最も好時節と思ふ。故に予は銀行の常務を一擲して組合に引移らんと計画せり。重大時機なり。併して此一年を組合の為につくして明年改選期に於ては組合よりも亦逃れんと計画す。

予記 銀行出勤。祐次郎來り伍組の改正を頼まれ又娘の話もあり。下男正去る。

発信 上田次郎、礼。林雅次、友三友部行ダメ。  
受信 松島大治、退職。

三月三十日 木曜

晴。信也の帰宅を待ち居りしも帰らず組合へ行く。支所に於て今日より初〔始〕まれる七年度製糸部決算の状況を見る。四十掛以上の配分なれば皆心窃に喜び居れり。丸山利雄來訪し、昨年貸し呉れたる保証印をけざるべく証書を持參せり。又決算に金拾円計りを現金にて受取り度旨申出ありたり、諾。支所に午前中居合せて午後銀行に出勤す。何故自ら辞表を出して銀行より去らざるかを疑ふ。銀行の行務、組合程には忙はしからずと雖も面白味もなし。(以下、六行分割除)竹泉堂來訪す。彼は西上柳の家政制〔整〕理に飛び込んで一仕事せんと意氣荒し。

予記 信也帰宅す。東京より買來りたる書画皆偽物なりと父は相手にせず。

発信 山本兄、下男を早く遣されたし。中平真次、商大入学祝。  
受信 山本兄。

三月三十一日 金曜

雨、春は寒し。四囲の山は雪、里は雨なり。ソコ寒き雨ふる。朝出發して組合支所にて江塚に會いて、委員として出張の状況を問ふ。原紙会社問題にて村より竹村と江塚と三人出県せり。他の上柳、鼎も同行せり。其結果警察部長、内務部長、工場課長等と會見して陳情し、県は一応実情を調査して然る後に断案を下さんと云ひて、其の当方の主張は前の契約に遵ひ会社は他に移転するか或は廃業すべしと迫れりと云ふ。本所に行く。佐々木理事來りて製糸部決算総代会の模様及工場を第二工場にマトメル事に付て予の意見を問ふ。予は既定の方針によりて進むの外なしと主張し、石原氏帰省せは氏とも話して運動を始

めんと答へたり。午後銀行出勤せり。頭取県会に特融を呈出する筈にて出張したり。午後六時帰宅したり。〔以下、二行分削除〕

子供等と団欒して語れは快よし。宮田代田より電話ありて明日行くと返事せり。

予記 下男来る。

発信 小林洋吉、所得税の事。